

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第五十七卷 第二号



2

幼児のための紙芝居

第三学期の生活をより楽しくするために

幼児テキスト紙芝居全集

(全二十四巻・各巻十二枚・定価二六〇円
全巻定価六、二四〇円・毎月二巻宛配本)

しろちゃんばんさい

健ちゃんがおとした靴をおっかけて、しろちゃんはどうんどうんはします。港にちかい、大きな川にでましたよ。

大ちゃんとボチ

捨て犬だったボチをひろって来て、大ちゃんは犬その可愛がっていました。そんなある日、大ちゃんとはとつぜん、大きな野良犬におそわれようとなりました。

動物名作物語紙芝居全集

(全十巻・各巻二十四枚・定価五〇〇円
全巻定価五、〇〇〇円・毎月一巻宛配本)

名犬ラッドものがたり

たすけてえー。川におぼれた女の子が死に者ぐるいで叫んでいます。その時、さっと川にとび込み、女の子に向かって泳いで行く犬がいました。

カタログ進呈

東京・千駄ヶ谷四ノ七一四
振替東京二九八五五
電話(34)二四四〇・三三二七

教育画劇

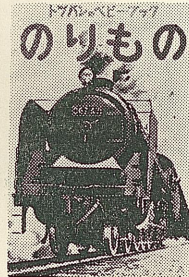
ベトビツパンの

幼児に与える最初の絵本
無心な幼児の眼に應える編集内容を
もった美しい丈夫な絵本

監修

東京都立大学教授

山下俊郎先生

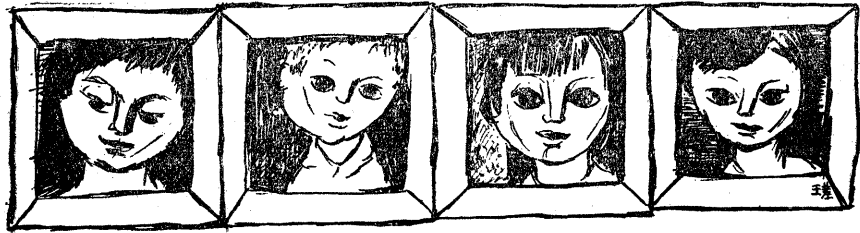


1 じ どう し や
2 こ ね し こ
3 お も ち や
4 の り も の
5 で ん り も の
6 ど う ぶ し の
以下続刊 各50円



東京日本橋茅場町一の三

トツパン

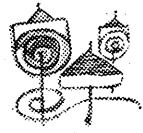


幼 児 の 教 育 目 次

第五十七卷 二月号

表 紙 安 泰

幼児の安全教育……………山下俊郎(2)
 風邪・感冒・インフルエンザ……………平井信義(7)
 子どもへの理解……………黒田成子(11)
 室内遊び……………吉田貞(14)
 うつぶし物語より……………関根慶子(18)
 誘導の動機に関する一考察
 いかによれば子どもは仕事に興味を示すか……………杉本陽子 河尻朋子 谷口喜久子(24)
 「父親」が子どもたちを助けます……………U S I S 提供(34)
 豆まきの夜……………創作……………鈴木正子(36)
 雑 想……………村田修子(39)
 (ヨーロッパの旅) スイス(トローゲン)にて……………平井信義(43)
 温室を造ろう……………松村義敏(48)
 保育の工夫 お山づくり……………長谷幸枝(50)
 遠足・運動会の反省……………(54)
 動物園への遠足と反省(吉田美智) 遠足(桐井つた) 天の橋立遠足の記
 (松谷郁子) 合同運動会(菊田との代) 秋季運動会の回顧(森下正作)
 運動会をふりかえって(黒川鈴子) 自由表現を生かした運動会(佐藤悦子)
 保育雑誌より……………(61)



幼児の安全教育

山下俊郎

一

この半年ほどの間、わたくしの頭に一ばん強くこびりついてはなれない問題の一つ、それは子どもたちの安全教育という問題である。このことについて書こうと考えているところへ、はからずもわたくしにとって一ばん身近な関係にある幼稚園の子どもが、今朝登園の途中で自動車にはねられたということが、留守の自宅に電話の知らせがあって、何となく身がちぢみ、胸がドキドキして、たまらない気持ちになりながら、今ペンをとっているところである。子どもは、どんな子

どもであっても尊い。死なせてはならない。けがさせてはならない。病氣させてはならない。どの子どもみんな元気にそしてスクスクと成長させなければならない。このことは、子どもの親にとってはもちろんのこと、子どもの保育にあたる教師や保母、園長みんなの強い願いでなければならない。

二

いま、手もとに細かい統計表がないのではっきりしたこと
を数字的に示すことができないのは残念であるが、厚生省の
発表になる一九五七年版の「健康と福祉」によると、次のよ

年 令 別 死 因 順 位

年 令	第 1 位		第 2 位		第 3 位	
	死 因 名	10万人 の中	死 因 名	10万人 の中	死 因 名	10万人 の中
0~4	新 生 児 困 疾 患 未 熟 児 の 有 病 不 慮 の 事 故 の 事 故	136人	肺 炎 及 び 氣 管 支 炎 赤 痢 疾 患	225	胃 炎 十 二 指 腸 炎 大 腸 炎 十 二 指 腸 炎	115
5~9	不 慮 の 事 故	31	赤 痢 疾 患	15	胃 炎 十 二 指 腸 炎	11
10~14	不 慮 の 事 故	14	心 臓 の 疾 患	6	全 結 核	6

うな死亡原因が、年令別死亡原因の統計表として示されている。(いま当面の問題として年令の大きい方は必要がないから、十四歳未満のものだけに就いて捨い出してみる。) 四歳未満の死亡の中では、乳児の死亡がかなり大きい割合をしめているので、死亡率そのものがひじょうに高いということ、そしてまたその結果として、死亡原因のうち第三位までは古くから、いわれている乳児死亡の三大原因がそのままここに現われているものと見ることができ。そして、ここで注意しなければならぬことは、五歳から十四歳にいたるまで「不慮の事

故」といわれる事故死が第一位を占めていること、しかもその率は五―九歳、十―十四歳の二つの年令階級のいずれにおいても、第二位の二倍以上になっているということである。

○―四歳という年令段階ではいま述べたように、乳児の死亡原因の比重が大きいので右のような結果になっているが、わたくしの記憶する所では、たしか三歳、四歳ではすでに事故死が第一位になっていたと思う。あるいは、二歳でもそうかもしれない。とにかく、子どもが自由に動きまわれるようになり、その自由度と生活圏がひろがり大きくなるにしたがって、事故による死亡は、幼児の死亡原因の中で大きな比率を占めるようになってくるのである。

このことは、こうして数字に現れてみるとたいへんはっきりしてくるのであるが、断片的にはしじゅうわたくし達の眼にふれている。新聞紙上に、アパートの二階以上の部屋の手すりから落ちて重傷したり死んだりする子ども、防火用水の池に落ちて死ぬ子ども、魚つりに行って川に落ちて死ぬ子ども、自転車や自動車にはねられてけがする子ども死ぬ子ども、新聞紙上にこういった子どもの記事を見ない日はないと

いっても誇張とはいえないくらいである。今年の春から夏にかけて、東京では留守のお隣りの家に行つて犬にかまれて命を落した幼児のことが、大きくジャーナリズムの上にとりあげられた。

三

このようにいわゆる「不慮の事故」による幼児の死亡というものに対して、わたくしたちはこの事故死をできる限り少なくするという責任を、子どもたちの保護の義務を持っていくおとなとして語っていることをまず強く認識しなければならぬ。未成熟な子どもたちが、生き、そして成長することを保証してやることはおとなの義務だからである。

わたくしたちは、このような事故死に対するおとなとしての責任を果す道に、二つの道があると考えてる。

その第一の道は、事故を起さないような方策や施設をおとなの側でたて作るということである。たとえば、さきに挙げたような例に則していえば、防火用水のまわりには、子どもが近よれないように、さくを作るとか、アパートの二階以上の

部屋には子どもがのぼれないようなそしてまた子どもの力で押し下げられないような手すりを作るといったように、危険な場所へ子どもたちが近づけないように、そして危険な事態が起らないようにすることである。

このような設備的な面に関しては、従来も保育者はいろいろのこまかいづかいをしてきている。とくに近來、幼稚園にしても保育所にしても、その施設の基準というものがはっきりしてきたこともあって、一応は幼児たちの生活の安全ということを保証する設備がかなりの程度にまで考えられるようになってきているといつていいであろう。したがって、このような面を軽くみていいという意味においてでなくて、可なり的心づかいがこの面にはいまままでなされているという意味において、幼児保育にたずさわっている保育者にとってはどちらかといえば自明のことに注するといつていいであろう。ただ、両親教育ということが保育の一環である限りにおいて、わたくしたちは保育者がこの面において幼児の親たちにはたらきかけ、親たちの関心をこの面にまでもちきたらせ、幼児の一ばん主な生活の場である家庭や近隣での事故を

なくするようにつとめることは、保育者としての責任である
ことをここに注意しておきたいと思う。

四

幼児の事故死に対するおとなとしての責任を果す道のうち、どちらかといえば、わたくしは第二の道の方がより重要であるといいたい。第一の道は、いわば、幼児の生活する環境を整えることによって、子どもたちを守るところに主眼があつて、いわば外から守る方法であつた。これに対して、わたくしは、子ども自身に、自分でみずから守る力をも身につけさせる方法がもっと大切であると思う。そしてそれは、子どもの年齢が大きくなるほどその重要さを増すものではあるが、幼児の生活においてもきわめて大切な意味を持つものであることを強調したい。この子ども自身に自分でみずから守る力をも身につけさせる、という方法が、ここにわたくしの問題としたい安全教育である。

幼児が安全な生活を送れるような習慣を養う。ということ
が幼児教育の大きな目標の一つであることは、すでに学校教

育法における幼稚園の目標の第一にこれがかけられている
ことをみれば、おのずから明らかであるといつていいであ
ろう。安全な生活ということには、きわめて広はんな事柄がふ
くまれる。死をもたらすにいたらないような事故について
も、けががないように、安全に生活させるということは大切な
目標である。小さなけがや、ちょっとした障害でも起きない
ようにというねらいから、生命を失うことがないようにとい
う大きいねらいにいたるまで、安全教育のねらいには多様の
事柄があり、いろいろの事柄を含む段階が形作られるであ
ろう。このいわば安全教育の目標については、一部は、幼稚園
教育要領に示されている。一面において、わたくしたちはこ
の幼稚園教育要領の実践によって具体的な目標の達成の可
性と限界とをつかむことが必要であろう。そして、それと同
時に、事故を防ぎ、生命の安全を守る、という点から考える
とき、もっと可能なことが考えられないかということをお省
みすることが必要であろう。さらに、もっと現実に必要なこと
がないかということをお、幼稚園や保育所の地域社会と地理的環
境とに即して考えてみる必要があるであろう。こうして、わ

たくしたちは、安全教育の目標、もっと具体的にいえばその具体的項目を、幼児の生活と環境の現実に即して、それぞれの保育者の立場において考えてみる必要があると思う。

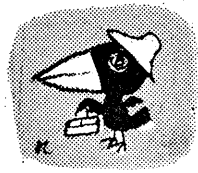
五

次に、安全教育の方法について少し考えてみよう。たとえば、ろうかの歩き方、道路の横ぎり方、といったような具体的な事柄について考えてみるとはつきりすると思うが、まず第一段はそのなすべきことの必要性を幼児に認識させることであろう。これは事柄によっては、低年令の幼児には無理なことであろう。しかし、安全教育の持っている重要な特性は、たとえ理解が無理であっても、安全を期する行動を一つの習慣として形作るようにしなければならないところに在る。もちろん、理解させることができればそれに越したことはない。なので、理解させた方がいいことはいうまでもない。したがって、幼児の発達段階に即して理解と認識とを得させるようにすることを、わたくしたちはまずつとめるべきではある。しかし、一ばん大切なことは、それぞれの行動の場における

行動の仕方を習慣として幼児の身につけさせるということであることを、わたくしたちは忘れてはならないと思う。そして、この習慣をつけていく方法を、保育者が研究することが何よりも必要であると思う。

六

安全教育ということとは、幼児の教育における最も重要な生活訓練の一つである。すでにアメリカの碩学アーノルド・ゲゼルも指摘している。すなわち、「身体的な事故もやはり心理学的な立場から考えなければならぬ。……こんな事故は、その原因をしらべてみると、両親なり子どもなりが、もう少し気をつけていれば避けられたのにという心理的要因による場合が多い。」(ゲゼル著、山下訳、乳幼児の心理学、六頁)のである。ゲゼルは家庭の両親を対象にしてこのように述べているのであるが、保育施設においてもおなじである。そして、すでにさきに安全教育の第一の面に関連して述べたように、両親教育としての保育者からの働きかけがやはり重要であることを、ここにも注意しておきたいと思う。



風邪・感冒・インフルエンザ

平井信義

昭和卅二年は、感冒の当り年でありました。感冒にかからないものは人間でないというほどに、学童にもおとなにも、幼児たちにも襲いかかりました。五月と十一月と二つの山をなして大流行になり、十一月の時は肺炎や心臓衰弱を併発して死亡する者さえも出る有様でした。

大流行といっても、人のまねをして感冒にかかるわけではありません。病原体が患者から他の人たちに伝染して、鼠算式以上にその数を増していくのであります。日本だけでなく、世界的な大流行になつていて、飛行機の発達した今日、流行の速度も増していると言えましょう。大正七・八年の大流行のときは、フランス戦線（第一次世界大戦）の一兵士に始まったと言われますが、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、そしてアジアと四界をなめ尽したのであります。

す。今度の感冒は、「アジアかぜ」とも呼ばれているように、アジアから発生していることは、もうご存じのことと思います。

感冒とインフルエンザとどこがちがうのかと質問されたことがあります。これは同じものであります。感冒はインフルエンザ・ウイルスというばい菌によつて起ります。ウイルスというのは、普通の顕微鏡では見えないほどの小さなばい菌につけた総称でありますから、麻疹、脊髓小児麻痺、その他沢山のものがこのウイルス族に属します。感冒には感冒独特のウイルスがあるわけですが、感冒のウイルスでさえ、A、A'、B、Cの四種類について、現在はつきりしたことがわかっていますが、この他にまだまだ沢山あるようです。今回流行したウイルスは、「東京A57」と名づけられたことは皆さまご存じのことと思います。すなわちA型に属する

もので、もとのA型とは若干性質が異つていと言われ、東京とか57とかがつけられたのも、その為であります。

感冒の診断には、ハーストの検査が用いられます。これは、感冒のウイルスが、人間の赤血球を凝集させる性質があるのを利用して考え出されたものなのです。感冒にかかると、人間の体内にはウイルスに対する「抗体」というものが出来ます。この抗体が血液の中にあると、赤血球は凝集されないので、この性質を利用して、人間の血清の中に出て来た抗体の量を調べようというわけです。

ことに、感冒の回復期の子どもには、抗体がふえているものですから、病気の初めの抗体の量と、回復期の抗体の量とを比較すれば、感冒にかかったかどうか、はっきりするのです。

この方法で調べてみると、年齢の少ないものほど、抗体が少ないことがわかりました。

しかし、実際の臨床には一人ひとりの子どもにハーストの検査をおこなうわけにはいきません。そこで臨床的な症状から、感冒か風邪か、その他の病気を判断するより他はないのです。

では、感冒に特有な症状にはどんなものがあるでしょうか。

急に寒けがしてきます。そして高い熱が出ます。高い熱はしばしば四〇度に及びますが、熱の山が二つ出来るのが、特徴とされています。

ます。すなわち、一度出た熱が下ったかと思うと、再び上昇してから下るのです。その間、のどが痛み、咳が出てからだがだるくなりますが、腰が痛かったり関節が痛んだりします。はなはだしい時には、ひきつけたり、もうろうとしたり、脳症状を呈することもあります。しかし、普通は三―五日の経過で、次第にもとに戻るものです。

そのような症状ならば、普通の風邪と大体同じではないではないかと訝しく思う方がありましょう。確かに、風邪との区別は、症状の上からではつき難いことが多いのです。発病の仕方を見ると、風邪の方は徐々に起るといわれますが、それは実際にはたいした目安になりません。比較的目立つちがいは、熱の山が二つにならないという点かも知れません。ところが、感冒でも、熱の山が二つにならないものが相当ありますし、風邪でも熱に二つの山が出来る場合もあるのです。

実は、風邪という病気は、まことにあいまいな病気であります。風邪かと思つてみると、脊髓小児麻痺が現れてきたり、伝染病の初期症状であつたり、異型性肺炎であつたり、あるいは結核が頭をもたげてきたりすることは平生よく起ることであります。これを「仮面としての風邪」と呼んでいます。

それのみでなく、軽い風邪にかかっているはずのおとなの人からその風邪をもらった乳児や幼児が、感冒に特有のはげしい症状を現わすことがたびたびあるのです。同じウイルスであっても、年齢によってこのように症状がちがうわけは、おとなには多少とも感冒に対する免疫体があるからでありましょう。逆に、幼児の感冒をうつされたおとなが、軽い風邪で終ってしまうこともあるのです。しかも、風邪と診断を下された患者の中にも、よく調べてみると、感冒のウイルスが発見されるといふ研究もある位であります。

いづれにしても、いろいろな伝染病の初期症状、すなわち「仮面としての風邪」、あるいは非常に軽い伝染病（これを流産型の伝染病といいます）を除いてみても、いわゆる「風邪」があるのです。それは、まだ病原体がはっきりしていないウイルスが原因となっていて、まだ考えられているものなのです。風邪のウイルスの研究が進めば今後ぞくぞくと正体ははっきりしてきましよう。ただし寒さにあたってストレスが起り、それによって粘膜の分泌が高まって鼻水・咳になるものもあることは認められています。その際にばい菌が繁殖し易くなるのも事実です。しかし、大部分の風邪は、不明のウイルスの伝染から起るものと考えられています。

風邪・感冒の症状は、発熱、くしゃみ、咳の他に嘔吐、下痢など消化器の病気の姿で現れることさえありますし、発疹を見たり、

あるいは脳炎のような状態を呈するものがあるので、なかなか診断はむずかしいわけです。よく医者は、かんとんに「風邪です」と診断をしますが、風邪の診断は最もむずかしいものの一つです。

風邪の大部に、そして感冒は、ウイルスによって起ることを分っていただけだと思いますが、これらのウイルスは、咳・くしゃみなどの飛沫の中にひそんでいて、他人にうつります。あるいは、大きな声で話しをしても、小さな水滴が口から飛びますから、それが他人の鼻・喉につくと、病気を起させます。一米以内が一番危険です。

ですから、病人の傍へいかなないことが、風邪・感冒から身を守る大切なことであります。ところが、病人がうろうろと出歩いていることがしばしばです。軽い風邪の人です。軽い風邪の人は、仕事があれば平気で出歩きます。ことにおとなの中には、そういう人が多いのです。ですから、子どもを人混みの中に連れていくことは、非常に危険なことと言えます。

幼稚園・学校などのような子ども集団にも、ひとり、軽い風邪の子どもが来ると、たちまち他の子どもに拡がる危険があることはすでに経験されているでしょう。ですから、ひとり・ふたりの子どもが感冒で休み始めたら、ことに昨年の流行時などには、学校・幼稚園を一時休みにすることが大切です。ですから、少し位の風邪

で、学校・幼稚園を休んではいけないなど言うのはたいへん不道徳な話です。

どうしても人混みに外出をしなければならぬ場合には、マスクをして予防する必要があります。ただし、マスクはガーゼを八枚重ね、新しいものであること。それは、不用意に咳やくしゃみを他人にかける人があるからです。人混みに出たあとは、ただちにうがいとさせることはばい菌を洗い流す意味でも効果があります。

予防注射も効果がありますが、感冒が東京A57によって流行している場合には、そのウィルスの感染に対して効果があるにすぎませんから、他の型のウィルスに脅されたときには効き目がありません。また、どの位の効果があるかについても、いろいろ議論のあるところで、今後ますますよい予防注射が工夫されることを期待しましょう。

風邪・感冒に特効の薬はありません。熱が高い時は下熱剤に強心剤を混ぜて処方します。子どもの場合は、安静の意味も含めて、鎮静剤をういます。熱で痙攣を起しやすい子どもにとくに効果があります。何よりも安静が必要です。暖かくしてよく寝ること。これが、感冒にうち克つ力を、患者自身の中に養うことになるのです。ですから、風邪薬をのみながら出歩くことは、公衆道徳を乱すこと

になるばかりでなく、本人のからだにもよくないことです。

子どもはとくに、風邪・感冒から気管支炎、気管支炎から肺炎になりやすいのです。風邪・感冒のウィルスが肺炎を起すではありませんが、このウィルスによって弱くなった呼吸器道が、他のばい菌の繁殖に都合よくなるからであると考えられています。どのような筋道で、中耳炎や急性腎臓炎も起ると考えられています。

風邪・感冒といっても、少し詳しく追究してみると、科学のメスの及んでいない点がいろいろあることがわかりでしょう。風邪の研究者たちは、その謎を解くために日夜努力をしているのです。むしろ、風邪というものは病気の幽霊と言ってもよいでしょう。その正体は、今後の研究によってはつきりしてくると思います。

* * * * *

子どもへの理解

(二)

黒田成子

前月は子どもを理解するためには、子どものあるままの姿を記録する自然的観察法によることが適切であることを述べました。そして、広く客観的な資料を積むことにより、その子どもに独特の一つの傾向が見出され、理解への糸口が出てくるものであると申しました。

今回も、その線にそって、子どもの園の未熟な経験を通して、少し具体的なことを記してみたいと思います。

私も教師たちが、自然的観察法による個人観察や逸話記録を始めて数年になりましたが、始めた当初、一同が口を揃えて申しましたことは、それまでは、目にとまらなかったような目立たない子どもに対してでも、近くなることができるということでした。その子どもの立場にたって考えてやれる、一種の共感的な感情がそこに働くのです。

子どもの方でも、「先生は僕のことだっと思ってくれるんだナ」と、その先生に対してなんとなく近づける気持を持ちます。教師の方では、問題のある子どものしつけを別にゆるめるわけではないのですが、ま

ず、問題を持ったそのまま子どもを受け入れてやれる愛情とゆとりが出てくるようになります。こうした好ましい教師と子どもの対人関係の上に、よい保育が可能となっていくのです。

このように、個人観察の記録をとることは、ある特定の子どもの理解する助けとなり、保育の上にも大きいプラスになります。さらに、記録そのものの内容について考えてみましょう。

ある研究所で、幼稚園と小学校低学年の教師たちの観察記録百余を検討したところ、総じて四つのタイプに分けることができますという事です。

第一は、子どもの行動をよいとか、悪いとか、適、不適などを評価するものです。例をあげますと、

「Tはお話しの時間に大声でふまじめに話していた。自分のしたいことばかりしたが、態度は悪く、教師の言うことに耳をかさない。」

といったような種類のものです。

第二は、子どもの行動について、解釈や説明を加える説明的なものです。

「今日もAは動き通しである。成長期にあるために落着くことがむずかしいらしい」

第三は、一般的、総括的な描写をしているものです。

「Kはこのごろ、とくに落着かない。ほとんど動き通しである。話し合いのときも、いつもそわそわしているが、教師が話しかけるとにっこりする。」

第四は、子どもがしたり、言ったりしたことや、前後の事情、周囲の人々の会話を記し、適確な描写をしているものです。

「肌をさすような寒い風が吹いていたので、今日は外遊びをしなかった。森組は、外遊びの時間にホールで積木をした。」

省三は箱積木で船を造りはじめ、靖彦はヒル氏の積木で自動車の車庫を造った。省三の船造りの方がしだいに人員も多くなり、構成も面白くなっていく。突然、靖彦と省三の言い争う声がきこえた。靖彦はしかめつらをして「皆、省ちゃんの方へ行っちゃうんだもの、ひどいや!」「だって、僕、しょうがないんだ

よ。知らないまに皆来ちゃうからッ!」

省三は困惑した表情で言った。」

私どものつけた記録をしらべてみます

と、前記のようにはっきりと四つのタイプに区分することはできませんが、子どものことを思うあまりに、つい説明的な、評価的な文章があらちちらに目につきます。

これは、記録の技術に慣れるまでは仕方のないことでしょう。たびたび観察の経験を重ねていこううちに四つのタイプの中でも、第四番目の適確な描写が多くなってくるのが望ましいのです。(主観を入れるときは括弧を用います)

しかし、ある人は、子どものありのままの行動を記すといっても、子どもは一日中活動していて、その記録を取るのには、人手の少ない園ではことにたいへんな仕事ではないか、また、資料だけでも、ぼう大なものになってしまおうと心配されるでしょう。

そこで、何を選んで記すかということが問題になってきます。初歩の段階にある教師が取り上げる題材は、どうしても教師中心のものになりやすいのです。私どもの最初の一年間の記録をひろげてみますと、子

どもの知能程度、仕事の出来ばえ、行儀、他人に対する態度、教師の感じる情緒的な面などが目立ってとり上げられております。

しかし、年を追って、発達心理学の本を共同で読み合ったり、ある年は、問題のある子どもと普通児をひとりずつ各組か選んで、年間を通して、とくにその子どもの観察を念入りにしました。そして、さらに、その子どもの製作品を見たり、家族との関係をしらべたり、知能テストをおこなったり、身体検査やさまざまなことを通して、子どもの身体的、精神的発達を知ろうとつとめました。

はじめは不慣れで、つまらない記録に時間ばかりとって疲労をおぼえましたが、次第に観察の着眼点をうまくとらえることができるようになりました。たとえば、

登園したときのようす、自由遊びのときの行動、

遊びや友だちのえらびかた、創作的な仕事のやりぐあい、興味の所在、

感情の表しかた、抑えかた など

保育中に子どもの顕著な行動が目につき
ますと、手早く小さいメモに二、三の要点
を記しておいて、放課後にまとめたり、あ
るいは、そのメモ用紙を一週間位はその子
どもの名前を書いた大きい封筒の中に入れ
ておいて週末に整理したりしました。ま
た、ある日は手のあいている実習生や助手
などに、ひとりについて三十分ぐらいの行
動の記録をとってもらいました。

次に一例を示しましょう。

「N先生が朝の礼拝のあとで、逃げ出し
た電気機関車」という童話を話してい
た。一同がしんとして聞いているのに達
夫はたびたび口をはさんで「達ちゃんのお
爺ちゃまも電気機関車を動かしている
とき、機関車が逃げ出したの。」とはしゃ
いで言った。お話しの終りの方で、乗せ
ていた貨物がひっくりかえったというこ
ころになると「先生、先生、ね、僕のお
爺ちゃまの、ひっくりかえったの。」と
大声で言った。

粘土製作のあとかたづけのとき、達夫
は片方の袖をまくし上げ、「こうすると

きれいになるよ」と言いながら、テーブ
ルをぬれたふきんでごしごし布く。

かたづけが終ると、中型の積木を始め
る。まもなく、ならべた積木の上をそろ
そろわたる。

袖をまくし上げたままである。

周囲には正弘、豊、珠代、康子たちが
いたが、達夫とは没交渉でアバウトごっ
こをしていた」

以上の記述は割合たしかに達夫の行動を
描写しています。子どもたちが動いて話し
ているようすが浮んでくるようです。

この子どもの記録には、繰返し、空想に
耽けるひとり遊びや言語が出てきました。
また、「僕？」の話題が目立ちます。私ど
もは、二、三回の記録で達夫を簡単に空想
的な子どもであると断定しようとは思いま
せんでした。あくまでも、彼への理解を深
めたいと、その自然の姿を求めました。

観察の回数は、最初は隔日でしたが、だ
んだんに、二週に一回ぐらになりまし
た。数日位の間隔で二、三行程度のことも
たびたびありました。もっとも大切なこと

は、たとえ一言や二言でも、子どもたちに
ついて、一年を通しておぼえがきをとめて
いくということです。

自然観察法や逸話記録法は時間がかかる
ことや、問題が社会的適応に限られるこ
と、主観的に流れやすいことなどの欠点は
あるとしても、子どもを一人格として観察
し、あらゆる場所で現場にある先生が簡単
におこなえることが何よりの長所です。

従来あまり省みられない、この目立たな
い方法は、まだ完全に分化していない幼児
を知る上に非常に参考になることと思っ
て、今回はこの問題について終始しまし
た。こうした観察を続けていくうちに、私
たちは特定の子どものみを理解するにとど
まらないで、一般の幼児、児童発達への理
解を深めていくことができ、ますます研究
の必要をしらされるものです。



室内遊戯

吉田貞

北陸路の二月は雪にあけられるといっても過言でないほど、時には美しく時には冷たく雪の自然に包まれる生活である。

雪国に育つ幼児たちは、その特権とでもいましょうか、雪こり雪合戦、雪の製作と、寒さをもとめせず雪の遊びに余念なく過すわけであるが、常に日射しあたたかい銀世界とは限らず見通しもきかぬ吹雪の日、雪どけやあま雪のためスボンや靴下にまで濡れとおる日もあり、室内での遊びが特に豊かに用意されねばならない時期である。

もちろん子どもたちは、放っておいても自然に遊びの工夫をし、限りなく遊びを展開していくが、個人差や遊びの偏頗の上から体育的な立場の上にも立ち、よりよき遊びの発展のために健康的な遊びに誘導し、積極的に参加させたいと思っている。

一、次のような観点で遊びを用意し、基礎能力を培い寒さに耐え、日々の集団生活を楽しくしたいと思っている。

- ・狭い室内で効果のあげられるもの
- ・運動量が多く寒さを忘れて楽しめるもの
- ・体力をねり、健康を増進するもの
- ・無理がなく安全性のあるもの
- ・いつでも誰とでも遊べるもの
- ・簡単に用具設備を利用し得るもの

地	床	走	跳	投	懸垂	団体
ねことねずみ 手ぎり鬼 ひょうたん鬼 横切り線鬼	取り からかい鬼 ものまね鬼	ひとり鬼 シヤガミ鬼 スキップ鬼 手つなぎ鬼 ジャンケン人	兎とび 川とび だんだんとび けんとび		相撲あそび (押し出し) 懸垂腕支持	リレー

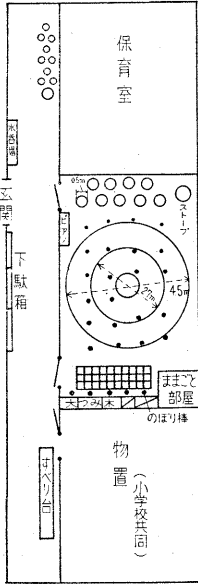
二、主として取上げられる内容は、下の表に示したとおりである。
 三、どのように遊びの工夫がなされるか

設備不十分な仮園舎のなかで

昨年度までの園舎は取りこわされ、旧小学校の狭い二教室に移転したが、再び取りこわされる運命にあり、何の設備もできない現状として、床上に最大限に角や丸をかき、大積木とともに活用し体力の増進と創造力の伸長に努力している。

大円は川とびや表現遊びの池や道になり、屈伸や跳躍・走を織り込んだものまね遊びに、小円は鬼あそびに跳や投の力試しに、小円はさらにその線上の板の目を利用した線あそびや行進に、四角はすぐろく遊び・陣取り・方向転換遊び・一つぬき二つぬきけんとびにと多面に活用している。

大積木は構成あそびに盛んに活用されているが、巧技台の代用としてまたぎとび越し・とびおりに、また同じ高さ(三十糎)のものを部屋の長さ一杯に並べ、右から左、左から右へ腕支持とびこし



その他	ピアノ・レコード・歌	積木・平均台	紅白球・ボール	なわ	棒
椅子取り だるまさん ころんだ さんが	雪の小坊主 北風さん 雪やさん	球とり鬼 ころがし ドッ ジボール	場所とり鬼 グザク鬼 争 からかい鬼	おみこし競争 ぶらさがり鬼	
輪投げ 紙飛行機 飛ばし	同上 いろいろな 木馬あそび べいと だるまさん	またぎとびこ とびおりに	とび石(なわ の輪)とび なわとび 波とび だんとび なわくぐり		
	いろいろなこ んべいと 竹の子一本 おしくらま んじゅ	構成あそび	球入れ 球あて 球のうけあ いごっこ ボールあて	つなひき	棒のぼり
幼児体操	風の子 エスオ グダイヤ ンドイ ブレッキ シヨグ ウテ		置替りレ 玉ころがし 手渡し競争	大波小波	

などいろいろと遊ばせる。なお四角の線がきは、三十糎立方の積木に合わせてかかれてあるので、併用してジグザグ跳おり跳こしなど、各種応用あそびに発展させることができる。一箱ごとにしやがむ、立つ、あるいは両手をつけて前進するなどその一つである。

こうした円や線は、数への直観を自然に培い、幼児たちが数あそびに楽しく活用しているのを見ても意義あるものと思う。

歌のある遊びやリズム遊びのなかで

・先へのべた遊びの観点に合致し、遊びの頻度の多いものに鬼あそびがある。この単的な鬼あそびも他の保育内容と連関しつつ、その経験や想像を劇化し、歌やリズムの中に遊ばせることが幼児の心理と深いつながりを持ち楽しい雰囲気の中にも効果をあげ得る。

・同じ歌や曲でも取り上げかたの工夫創作により喜んであきることなく参加できる。

・北陸路に特に発生した郷土色豊かな遊びはないが、幼児たちはいつの間にか巧みに消化し、親しみ、協力性や美しい愛情を育てつつ大きくなっていく姿から、歌あそびを大いに取り上げたいと思う。

・室内にとじこもるはけ口と教師自身甘く考え、曲をそっちのけの動きや、夢中になり過度の表現活動による疲労を来たさぬよう、軽快なりズムにのった生活表現をさせたい。

1、雪やこんこ

・スキップ鬼・ジャンケン鬼

狭い室内でかけまわる危険防止の面から、よい鬼あそびである。

雪あそびと名付けただけでも興味数倍し、両手をかざしチラチラ雪を表現し、曲に合わせて自由にスキップしてまわる。一曲後ジャンケンしまけて消えた雪は後手に組み、再びスキップする、次の曲後ジャンケンで勝てばまた雪にもどる。

足ジャンケン遊びを一曲ずつはさみ、最後の石・紙・鉄で勝負をきめることも非常に喜び、勝負が決まらなくとも皆がスキップでまわっている間跳躍をつづけて楽しんでいる。

・ジャンケン子ふやし鬼

こどもたちは全員雪となって、前記のようにスキップ鬼をする。教師は手さげの中に霰（白玉）を用意し、握まえたものに渡していく。鬼を余り多くすると危険性もあり、五、六個の白玉を（鬼の目印）かかげつつ鬼あそびをする。時には曲をはぶき「アラレンこちら」とからかい鬼にするのもよい。なお手つなぎ鬼に発展する場合も、ルールが守れ危険性をなくすために三、四人を限度とする。

2、いろはにこんべいと、おしくらまんじゅ

腕の筋力を強め、全身を使って活潑に展開される遊びで、是非取入れたいし、幼児たちも好んでするが失格者の活動も忘れぬこと。

3、北風さん

北風を三、四人つくる「北風北風ヒュッヒュッヒュッ。」とうたいつつ雪だるまのまわりをまわる。あとの者は連手して雪だるまを

つくり歌にあわせて手を上下する。北風はすきを見て円内に入る。ひとり入ることができたら雪だるまは吹とぶことになり、急いで安全地帯に逃げる。掴まえられたものは北風になる。

4、椅子取り

北風が腕を廻転、風を表現しつつ「お家がとんだ」あるいは「だるまさんがとんだ」と叫ぶ。家になった者あるいはだるまは急いで引越し、椅子とりをする間に北風は腰かけてしまう。リーダーになる北風は、ひとりでよい。椅子とりの失格者がひとり出るので北風となる。次々椅子の数を減らしていく椅子とりより、活動量があり冬向きである。

5、フォークダンス、その他

誰とでも仲よく協力して遊ぶ楽しさのうちに、動作をリズムカルにし、美しい情操を養いつつ全身運動として採暖できるフォークダンスは、一曲終っても次々要求して止まないものの一つである。既製の複雑なものをさげ、単純でつきつき相手がかわるようにならぬ自由な体型で楽しませる。

木馬あそびは木馬になるもの、乗るものの二人組で、ただ跳躍するのみであるが、俄然幼児の顔が色めきたつ遊びである。曲の変わり目で交替させ、過疲にならぬよう注意する。

力試しの遊びのなかに

・二月はとくに集団生活における遊びが充実する時であり、いろいろ

ろの遊びにうまく参加することにより、どの子にもやればできるという自信・成功感と、遊びへの積極的態度と興味を深め、小学校へとおくり出したい。

・危い遊びをしないように方向づける。

1、なわ遊び

波状にゆれる縄(床上)や、高さ四十糎ほどの縄にさわらないで飛びこしができる。また縄を何本か張っておき、その下を後反してぐるぐる。リズムに合わせて縄とびをする。各自の縄で円をつくり、とび石遊びをするなど縄の利用も多面に考えられ大いに活用したい

2、棒のぼり

鬼ごっここの時、棒のぼりをしている子は掴まれないことにしたり、りすや猿の木登り競争に発展すると喜ぶ。

3、紅白球・てまり・ボールあそび

投力をねる上の誰一の手軽で親しまれる遊具である。的当・球入れなどじゅうぶん取上げたい。

4、お角力ごっこ、其他

自分の力を思い切り出す遊びや、豊富に手近な遊具を利用した遊びに誘導し、教師も一つの遊具としてともに遊び、一人ひとりの個性を見抜きつつ、偏せぬよう円満に諸能力を力づけるとともに創造性を伸ばし、ルールを守り、協力的や美しい心情を育てたいと思う。

(金沢大学付属幼稚園)



う つ ぼ 物 語 よ り (二)

関 根 慶 子

五、天より奇瑞あらわれて、俊蔭、琴三十を得る。

阿修羅あすらいやますますに怒りて曰く、「汝が累代るだいの命をとどめんとてこの木一寸をうべからず。その故は、世の父母仏になり給ひし日、天稚御子あめわかみこくだりまして、三年掘れる谷に、天女くだり音声おんじやうがをして植ゑし木なり。さてすなはち天女のたまはく『この木は、阿修羅の萬劫の罪なかばすぎむ世に、山より西にさしたる枝枯れむものぞ。そのときに倒して、三分にわかちて、かみのしなをば三宝さんぽうよりははじめたてまつりて忉利天たうりまでにおよぼさむ。中のしなをばさきの親に報い、しものしなをば行末の子どもに報いむ』とのたまひし木なり。阿修羅を山守となされて、春は花園、秋はもみぢの林に天女くだりまして、あそび給ふ所なり。たはやすく来たれる罪だにもあり。いはんや、そこばくの年月撫でおほしたて、萬劫の罪ほろぼさむ、あしきさまのがれむとて、まかりこづくれるを、おのが一分のとくなし。なによりてかなむちが一分あたらむ」といひて、たゞ今食はまむとする時に、大空かいくらがりて車の輪のごとくなる雨ふり、いかづちなりひらめきて、竜に乗れる童わらわ、黄金こがねの札を阿修羅にとらせてのぼりぬ。札を見ればかけるこも「三分の木のしものしなは日本の衆生俊蔭に施せす」と書けり。阿修羅

おほきに驚ろきて俊蔭をなゝたびふし拝み「あなたふと。天女の行末の子にこそおはしけれ」と尊びてはいはく、「この木の上中のしなは大福德の木なり。一寸をもちてむなしき土をたゝくに、一万恒河沙じやうがしゃの宝をいづべき木なり。しものしなは声をもちてなむながき宝となるべき」といひて、阿修羅木をとりいでて、わりこづくるひゞきに、天稚御子くだりまして琴三十つくりてのぼり給ひぬ。かくてすなはち音声樂して天女くだりまして、うるし塗りたなばたに緒よりすげさせてのぼりぬ。

〔口説〕 阿修羅は、いよいよますます怒つて言うには、「お前が先祖代々受けついで来た命を、たとえたち切るとしても、この木は一寸もお前のものとするとは出来ない。なぜなら、この世の父母が成仏なさった日に、天上の童子がお降りになって、三年かかって掘った谷に、天女が降つてきて音声樂を奏して植えた木なのだ。それでつまり天女がおっしゃるには、『この木は、阿修羅の、何万年もかからねば消えない大罪が半分消えた時に、この山から西の方にさし出た枝が枯れるだろうよ。その時にこの木を倒して三つに分けて、上の部分を三宝を始めとして忉利天までに供養をおよぼそう。まん中の部分は前世の親に差上げ、下の部分は未来の子孫に与えよう』とおっしゃった木なのだ。そして阿修羅をこの山の番人となさつて、春は花園となり秋は紅葉の林となるここに、天女が自身お降りになってお遊びになる所なのだ。こういう所にやすやすと踏みこんで来た罪すらある。まして、何年もの長い年月大切に育てて、漠大な罪を消そう、罪業の深い悪いこの身を逃れたいと思つて、ここへ来てこうして木造つていても、自分としてはこの木の一部分もわが物とは出来ない。それなのに、一体何の理由でお前が一部分でも受けられようか」と言つて、阿修羅は今にも俊蔭を食べてしまおうとする時に、俄かに大空が暗くなり、車輪のようなひどい大雨となり、雷が鳴り稲妻が光つて、その中から竜に乗った童子が来て、金の札を阿修羅に渡して天に上つた。その札を見ると、書いてあることは、「三つに分けた木の下部分は日本国の民俊蔭に恵み与える」と書いてある。阿修羅はたいへんに驚いて俊蔭を七度礼拝し「ああもつたいない。天女の御子孫であられたのだ」と尊敬して言うには、「この木の上中の部分は大きな福德を持つている木です。その一寸でもって何も無い土地をたたくと、ガンジス河の砂のように無数の宝を出すことの出来る木です。下の部分は、よい音を出すという点で永遠の宝物ともなるはずですよ」と言つて、阿修羅が木をとつて割り木造る響に応じて、天稚御子がお降りになって、琴を三十造つて天にお上りになった。こうしてすぐ音声樂を伴奏として天女が降つておいでになり、漆を塗り、機織たなばた女に糸をよらせ琴に張らせて天にのぼられた。

註 音声樂——雅樂の伴奏のことかという。

三宝——仏・法・僧のこと。この三は尊貴すべきもの故、宝という。

伽利天——帝釈天王の居所。この天上の人はつねに長寿を得て遊戯娛樂するという。

六、不思議なすぐれた二つの琴と天人の降下。

かくて三十の琴を造りて、俊蔭、この林より、西にあたる梅檀の林に移ろひて、この琴の音を試みむとて、いでたつほどに、つじ風出で来て三十の琴を送る。そこにて音を試みるに、二十八は同じ声なり。なかばを二につくれるは、山くづれ地われさけて、なな山一つにゆすりあふ。

俊蔭、清く涼しき林にひとり詠めて、琴の音がある限りかきたててあそぶに、三年といふ年の春、この山より西に当る花園に移りて、琴どもならべおきて、大きな花の木のかげに宿りて、わが国のこと思ひやりつつ、声まさりたる二つの琴を試みるに、春の日のどかなるに、山を見れば霞みどりに、林を見れば木の芽けぶりて、花盛りに面白く、照る日の午の時ばかりに、琴の音をかきいでて声ふりたててあそぶ時に、大空に音声樂して、紫の雲に乗れる天人、七人つれてくだり給ふ。俊蔭ふし拝みてなほあそぶ。天人花の上におりてのたまふ。「あはれ何ぞの人か。春は花を見、秋はもみぢを見るとて、われらが通ふ所なれば、飛ぶ鳥だに通はぬに、たよりなき住ひはする。もしこれより東に阿修羅が預かりし木得給ひし人か」とのたまふ。俊蔭、「その木たまはれる衆生なり。かく仏の通ひ給ふ所ともしらず、しめやかなる所となむ思ひて、年ごろ籠り侍る」と答ふ。天女のいはく、「さらば、われらが思ふ所ある人なれば、住み給ふなりけり。天の掟^{おきて}ありて、あめのしたに琴ひきて族^{ぞう}たつべき人になむありける。我は昔いささかなる犯しありて、ここより西、仏の御国よりは東なる所にくだりて七とせありて、そこに我子七人とまりにき。その人は極樂浄土の樂に琴をひきあはせてあそぶ人なり。そこに渡りて、その人の手をひきとりて、日本へは帰り給へ。この三十の琴の中に声まさりたるをばわれ名づく。一つをばなん風とつく。一つをばはし風とつく。この二つの琴をばかの山の人の前にてばかり調べて、また人に聞かすな」とのたまふ。「この二つの琴の音せん所には、娑婆^{しやば}世界なりとも必らずとぶらはむ」とのたまふ。

〔口訳〕 こうして三十の琴を造って、俊蔭は、この阿修羅の林から、西にあたっている梅檀の林に移って、この琴の音のためそうと思つて、そこから出立する時に、つむじ風が急に起つて三十の琴を梅檀の林に送つた。そこでその林に来て琴の音をためすと、二十八は同じ音である。中央を二つに造つた琴を弾くと、実に驚くべきことに、山はくずれ地はわれさけて、七つの山が一しょになつて鳴動する。

俊蔭は、清くすがすがしい林にひとり歌をうたいながら、琴の音をある限りかき鳴らして音楽をして日を過していたが、三年たつた年の春この山から西にあたる花園に移つて、琴などを並べておいて、大きな花の木のかげにいて、自分の本国のことや父母のことを思いやりながら、例の特別に声のすぐれた二つの琴を弾いてみると、折から春の日はのどかなところに、山を見ると霞はみどり色にたなびき、林を見ると木の芽がけふるように芽吹いて、花は今を盛りと美しく、日の照っている正午ごろに琴の音を鳴らし声をあげてあそんでいると、その時、大空に音声樂が聞えて紫の雲に乗つた天人が七人連れだつておくだりになった。俊蔭は驚いて礼拝してなおも音楽を続ける。すると天人は花の上におりて来ておっしゃる。「ああ、あなたはそういう人か。春は花を見、秋は紅葉を見るところと私たちが通つて来る所だから、ここは飛ぶ鳥さえ来ないのに、さびしく住んでいるのですか。若しやここから東に阿修羅が管理している木を取得なされた人ですか」とおっしゃる。俊蔭は、「その木を頂戴した者でございます。このように仏天人の通つていらっしゃる所とも知らないで、静かなよい所だとばかり思つて年来ここに籠つておりましたのです」と答える。天女のいうには、「それでは私たちの考えるところのある人だから、こうして住んでいらしたのです。天のとりにきめがあつて、あなたは天下に琴をひいて一家をなすべき人であつたのですよ。私は昔ちよつとした罪を犯して、ここから西で仏の御国からは東にあたる所にくだつて七年過し、そこに私の子が七人住みつきました。その人たちは極楽浄土の音楽に琴を合奏させる人です。そこへ行つて、その人の奏法を弾き覚えて、日本へはお帰りなさい。また、この三十の琴の中で音のすぐれている二つの琴に私は名をつけます。一つの琴を、なん風とつけます。もう一つのを、はし風とつけます。この二つの琴をあつた山の人の前だけで弾き、外の人には聞かせてはいけません」とおっしゃる。そして「この二つの琴の音のする所には、たとえ娑婆世界しやばであらうと、きつとたずねましよう」とおっしゃる。

註 娑婆世界——「娑婆」は堪忍の意。三千大千世界。この世、現世のこと。

七、俊蔭、天女の言に従ひ七仙人をたずねる。

俊蔭、天女のたまふに従ひて花園より西をさして行けば、大いなる川あり。その川より孔雀くわんかくいできて、その川を渡しつ。琴をば例のつじ風送る。それより西へ行けば谷あり。その谷より竜たついで来て越しつ。琴はつじ風送りつ。それより西をなほ行けば、さかしき山七つあり。その山より仙人いでて越しつ。それより西を行けば虎狼ひと山さわぐ所あり。象き出で来てその山を越しつ。それより西へ行けば、七の山に七の人ありて、いひしが如くに住む所にいたりぬ。一つといふ山をみれば、梅檀の木のかげに、林に花を折りしきて琴ひく人、年三十ばかりにてあり。俊蔭立ち居拜む。山のあるじ大きに驚きてこれは何ぞの人ぞ。俊蔭答ふ。「清原の俊蔭、まゐり来つることは、しかじかなむのたまはせしかばなむ。」その時に山のあるじ「あはれ蓮花の花園のおのが親の通ひ給ふ所ありか。日の本の人なれど、花園よりと聞けば仏の通ひ給はんよりも尊く」とて同じ木のかげにすゑて事の由をくはしく問ひ給ふ。俊蔭始めよりの事をくはしく申す時に、つじ風例の琴どもをみな同じ如く置きつ。その時に山のあるじ、俊蔭が琴の音を試みて、かなしび給ひて、俊蔭とつらね給ひて二つといふ山に入り給ふ時に、その山のあるじ珍らしがり給ふ。客人きやくとの聞え給ふ。「あやしう蓮花の花園よりといふ人のありつれば、母の思のかなしく乳房の恋しさになむるて参りつる」との給へば、あるじはあはれがりて、三人つれて三つといふ山に入り給ふ。そこにも同じことのたまひて、四人つれて四つといふ山に入り給ふ。そこにも同じことのたまひて、五人つれて奥へ入り給ふ。そこにも同じことのたまひて、六人つれて奥へ入り給ふ。そこにも同じことの給ひて七人つれて入り給ふ。その山のさまは心ことなり。山の地は瑠璃なり。花を見ればほひことに、紅葉を見れば色ことにほこりに、浄土の樂の声風にまじりて近く聞え、花の上には孔雀くわんかくつれて遊ぶ所に、七人つれて入り給ひてその山のあるじを拜み給ふ。

〔口訳〕 俊蔭は天女のおっしゃるとおりに花園から西をさして行くと、大きな川がある。その川から孔雀が出て来て俊蔭を渡してくれた。琴の方は例のようにつむじ風が運ぶ。それからもつと西へ行くと谷がある。その谷から竜が出て来て俊蔭を越えさせた。琴はまたつむじ風が吹送った。それから西へもつと行くと、けわしい山が七つある。その山から仙人が出て来てまた

無事に越えた。その山から西の方に行くと虎や狼が山中に騒いでいる所がある。しかし象が出て来てその山を越えた。それから西へ行くと、七つの山に七人の人がいて、あの天女が言ったとおりに住んでいる所に着いた。第一の山を見ると、林の中で梅檀の木のかげに、花を折って敷きその上で琴を弾く人がいて年は三十ばかりである。俊蔭は立って拝み坐って拝む。山の主は大層驚いて「これはどういう人か」と言う。俊蔭は答える。清原の俊蔭です。ここへ参りました次第は、天女がこう仰せられたからでございます」と。そうすると山の主は「ああそれでは、蓮花の花園の、私の母親がお通いになる所から来られたのですか。日本の人らしいが、あの花園からと聞くと仏のおいで下されるよりも尊く思われて」と言って同じ木のかげに俊蔭を坐らせて事の次第をくわしくお聞きになる。そこで俊蔭は始めからのことをこまかに申しあげている時に、つむじ風がまた例の多くの琴をみんな運んで来て同じようにそこに置いた。その時に山の主は俊蔭の琴の音をためして、その音に感激なさつて、俊蔭と連れだつて第二の山にお入りになると、その山の主はそれを迎えて珍客だと思ひになった。客人が申されるには珍らしくも蓮花の花園から来たという人がありましたので、母の恩愛が慕わしく母の乳房の恋しいあまりに連れて参りました」とおっしゃると、主人は大層感動して、三人連れだつて第三の山にお入りになる。そこでも同じことをおっしゃつて四人連れだつて第四の山にお入りになる。またそこでも同じことをおっしゃつて五人連れだつてさらに奥へお入りになる。そこでも同じことをおっしゃつて六人連れだつてまた奥へお入りになる。そこでも同じことをおっしゃつて七人連れだつてさらに入つて行かれる。その第七の山のようにすは特別である。山の地肌は瑠璃である。花を見ると香りが格別で、紅葉を見ると色がとくに美しく、極楽浄土の音楽の音が風にまざつて近く聞え、花の上には孔雀が連れだつて遊んでいる、そういう所に七人が連れだつてお入りになって、その山の主をお拝みになった。

〔附説〕 このあと、俊蔭はこの山で七仙人とともに琴の秘曲を奏でる。そこへ仏が雲の輿に乗つて下り、浄土の楽と響きあつてすばらしい音楽となる。こうしてやがて俊蔭は帰朝する。俊蔭の得た琴の秘曲は、天女の予言のとおり、子や孫に伝えられてゆく。本号で俊蔭の漂流譚を終えることにする。次は仲忠の孝養譚にうつる予定である。

誘導の動機に関する一考察

——如何にすれば子どもは仕事に興味を示すか——

杉 本 陽 子
河 尻 朋 子
谷 口 喜 久 子

毎日の幼稚園生活の中で、子どもたちは今まで知らなかった新しい場面にゆきあたり、驚きの眼をもって、一つ一つの物事にぶつかりながら、自分の個性を伸ばし、自分と一しよに過してくれるお友だちの存在を知り、遊びにリズムに製作に、楽しい時を過しながら、一瞬も静止することなく成長してゆく。

こうした子どもたちと一しよに過し、その成長を、いつも目の前で見ている私たちは、この子どもたちの発育の芽を上手に伸ばし育てるために、いつも、適当な環境を準備しようと細かい心遣いをしたり、カリキュラムを考えたり、その実行のために、綿密な計画をたてて材料をととのえたり、いろいろと気をつけている。ところが、その反面、その準備や計画が単に理論的なものに流れてはいな

いか、子どもたちの心とへだたててはいないかという配慮こそ必要でありながら、案外なされていらないのではないだろうかという気がする。押しつけられた仕事、興味を失った顔の子どもたち、自分の意思のままに動かない子どもたちを眺めて当惑する先生。それに反して、同じ一つの保育内容を実行に移す場合でも、ちょっととした気のくばり方によって、子どもたちの心の中にひそんでいた意慾をひきだし、生き生きと輝くうれしそうな顔に迎えられると、同じ環境の中にいるとは思えないような暖かさに思いがけない興味ある発展がみられたりする。

では、同じ一つの意図を私たちがもっていてそれを実行に移すとき、なぜ、こんな違いがでてくるのだろうか。その点を考えるとき、

ここに動機づけ、導入の仕方の問題が浮び上がってくるのではないだろうか。机の上でたてられたプランも、かなりの中と気持の余裕をもっていないと、実際の場面にゆきあたり、その日の子どもたちの状態や全体の雰囲気によって、案外もろくろくずれかかるとのであることは私たちの日常経験するところである。

そこで私たちは、教師の意図を実行に移す場合あるいは子どもの活動を発展させる場合に、どのようにして動機づけるか、また、どのような場合により効果がみられるかを、自分たちが日常おこなっている保育の実際の体験の中からとりあげて、もう一度反省する資料とし、また今後の参考にしてゆきたいと思い実行に移した。以下はその記録の一部である。

A 子どもの提案をとりあげた場合

例 1

朝、自由遊びを楽しんでた女の子のグループが走ってきて、「先生レコードかけてちょうだい。」と言うので、「どんなのがいいの。」と尋ねると、「いつかの。」と答える。（運動会の時、おどったものがとても好きなので、それ以後、時々レコードをかけて楽しんでいました。）すぐに、それらのものを選びだし、その他に新しいレコードを加えて準備しておく。子どもたちは待ちどおしいらしく「先生も一しよにおどってね。」などと、まわりでびよんびよんはねながら

言っていたが「レコードをかけたら行きますよ。先に外にでて待っていてちょうだい」とうながすと、勢よく返事をして走りで行った。レコードをかけて拡声器に入れながら窓からのぞくと、もう、きちんと二人づつ手をつないで待っているので、びっくりする。

（結果）

その後、かなりの時間を楽しく踊って過すうちに他の子どもたちも加わり、大きい輪になったり庭中に散らばったりしながら踊った。新しい遊戯の時は先生が先頭になったり中心になったりして、その場で、すぐに一しよに踊ったが、みんな、うれしそうで元気にのびのびとしていて嫌がる子どもはいなかった。

例 2

登園後、遊んでいた子どもうちの数人が「先生、人参やごぼうをつくろう」と言い出したので、昨日の野菜つくりの時の材料を運んできて作り始めた。これを見て飛行機をとばして遊んでいた子どもたちも「僕も作ろう。」と、途中で止めて製作に加わる。外で遊んでいた子どもたちも、室の子どもにさそわれたり、自分でのぞきにきて、興味をもったりして、ぼつぼつと中に入ってきて、ほとんど全員が交代に製作を続けていた。

（結果）

予定していたよりも、はるかに早く、たくさんでき上った。昨日の製作「野菜つくり」に非常に興味をそそられていたので、今日は

子どもたちの方から言いだして続きをしたのだが、「もう片づけましょう。」と言いだした時も、時間がなくなつた為に、止むを得ずきりあげるのであつたせいで、不服の子どももあり「もう帰るのもっと作ろう」とつまらなそうであつた。

例 3

まだ遊びの最中であつたが、十時頃じかに遊戯室へ集める。歌を教えようとしたら「むすんで開いてをして」とA子の発言、皆それに同意を示すので、交代で舞台の上に昇りリーダーになることに決める。途中より「あなたのまね」に変える。

その後で遊戯「山のみなさん」を皆でする。今日始めて教えたのだが、これは皆の好きな曲で、二番まで一度に覚えてしまった。更に二・三の知っている遊戯をしたあと、一男児の希望により「うさぎとかめ」を教える。これは運動会に他の組がしたものである。一人ずつスキップ二回、室に行進で帰る。

(結果)

今日はひさしぶりにしたせいか、集まりが良い。そしていつもあまりしたがらない子どもも集つて来た。むすんで開いてもほとんど子どもがリーダーになり長時間続けられた。更に遊戯もいつも見ていてあまりしないような子ども喜んで参加していた。いつもこのように全員が参加してくれたらと思うのだが、何しろ今日は落つて良く出来た。

例 4

朝九時四十分頃一昨日何人が作りかけていた菊の花(「何かつくらせて」と言つて来たので「じゃあ散歩で見て来た菊の花をつくりましょう」と数人のやりたい子に作りかけさせてあつた)をB子がしたいと言つて来たので紐、色紙、ひごなどを出してあげる。自分の作つた植木鉢をさがして来て花を作る。葉も茎も付けた物は私が片木の箱の蓋を利用して植木鉢に止めてあげる。子どもたちはそれをぎっかけに入れ代り立ち代り来ては作る。この時動物が作りたいと云う者には動物を作らせる。

(結果)

花を造るのは割合こまかい指先の仕事を要求されるので面倒だつたらしいが比較的長く続き、やつた子どもは何とか完成し、中には何輪も作つた子もいた。

動物も自分で顔など思いおもいに造つて貼り付けかわいいのを造つてきた。動物と菊の花と両方造つた子もいる。いつも外ばかりで、あまり皆と一しょにしない子ども今日は作っていた。ずいぶん長い間していたらしく、気がついたら十一時半になっていた。それから皆で手伝つて片付けた。

例 5

今日はお天気も良いので外遊びに人気がある。子どもたちが花飛び競走をしたい(運動会にしたもの)と言いに来る。そこで、部屋

の中にいた子も誘って外へ下りると、「縄を取って来るわね」と言
って子どもが取りに行く。途中で飛び越す縄を持つ子も決り、はじ
める。子どもたちが出発の線より出ないように他の子を並べ、出発
の合図の号令をかける。あわてん坊がいるとやり直し、ちゃんと規
則が定っていた。私が合図をしたり子どもがしたり、縄をとんだり
ぐぐったり、しまいはりレーになる。まりをバトンの代りにし
て、まりの渡し方など（手渡さないで投げたりした場合など）反則
した時はした方が負、両方がした時は引分と決めて始めた。

（結果）

皆思う存分走っている。縄の持ち手も人気があり上手に交代して
いた。約束を破った者は皆の総攻撃にあう。しかしやはり勝ちたい
らしく、何回となく負けた者は次第に離れて行った。最後までリレ
ーをしていた者はよほど面白いらしく、なかなか止めようとしな
かった。今日はお互で決めたルールを良く守り元気に遊べた。また参
加者も多く男女とも楽しくかなり長時間遊んだ。

B 提示によって子どもの興味をひいた場合

例 1

朝、出来上った籠を保育室のピアノ上の、子どもたちに見える場
所に置いておく。登園してきた子どもたちが早速みつめて、「先生、
今日これつくるの。」「いつつくるの。今。」「これお家へ持って帰る

の。」「これ、きれいだね。」などと聞きだしたので、「それじゃ、作
りましようね。」とマイクで、「籠を作りたい人はいらっしやい。」と
外の子どもたちを呼んだ。遊んでいた子どもたちも、籠をみつめて
作りたがっていたので、すぐに入ってきて始める。

（結果）

三人ほどは、ちょっと遊びに夢中で、「作りたくない。」と入って
こなかったもので、しばらく、そのまましておき、ほとんどの子ど
もたちが興味をもって作り始めて後、呼びにいくと、急いで入って
きて全員がそろった。籠を家を持って帰るのも、うれしかったらし
く、楽しそうに製作していた。

例 2

三日前から続けてきている八百屋さんごっこの製作に、子どもた
ちがたいへん興味を示しているので、今日は果物の製作の材料を用
意しておいた。朝、男の子のひとりが職員室に入ってきて「先生今
日は何を作るの。」とたずねるので、「今日は果物をつくったらどう
かしら。」と答えると、「僕今作ってもいい。」と乗気になってきた
ので、紙を渡す。ようすを見ると、すぐに保育室に紙を持って
とんでゆき、「いいな僕、果物作るんだから。」とうれしそうに大声
で言ったので、まわりの子どもたちも、その子のそばに集り、画用
紙を眺めたり、口々に尋ねたりしている。そこで、早速、紙をもっ
て保育室に入って行き、「みんなも作る？」と声をかけると、「作

る。「作りたいたい。」とクレヨンや鋏をだしてきたので一つの机に材料を置き、自由にとつてきて作るように準備して始める。

(結果)

出来上った果物から棚の上に順番に並べると、ちょっとお店こころしい雰囲気が出てきたので、子どもたちはすっかり喜んで次々に作りあげては並べていった。ひとりりが、お野菜もまだ足りない。と言いだし昨日の材料を持ってきて作ったり、お金や財布を作ったりして、ほとんど全員で、だいぶ長い時間を過した。

例 3

ボール箱の中に芯を入れ、ボール紙にふせてひもでとめただけの山の原型を、朝、へやへもつて来ておいておく。数人の子どもがやって来て「これ何するの」と聞くので、「さあ、何でしようね」と問い返す。わからならしい。「これね、山にしようと思うのよ」というと、子どもたちはへえとびっくりしたような顔をする。「このままではおかしいけれど、みんなで考えて、紙をはったり色をぬったりすれば、きつときれない山になるわ」「うん、そうだね」とひとりの男の子がうなずく。「しよう、しよう」と、さっそく用意してあった和紙で下張りが始まる。「疲れたらほかの方とかわってちょうだい」と頼めば交代にくる子どもがある。またたくうちに山らしい形ができあがった。色をぬるといったが、下張りが乾くまで待つようにいう。おそく来た子どもは、ほかの子どもたちから山の

ことを聞き、下張りのできた山を興味深げに眺めている。「何にもないじゃないか」という子どもがある。「そうね、じゃ山に何かがあるかしら。」「木が生えてる」「動物だっているよ」……子どもたちのおしゃべりが始まる。そこで当番の子どもに皆をへやへ集めてもらうよう頼んだ。山のことに全然関心を示さなかった子どもも二、三人いるので、もう一度「秋の山」を作りたいたいことを話し、何を作ったらよいか話し合つて、まず皆で木を作ることにした。

(結果)

となり同志むかい同志おしゃべりしながら楽しそうに作っていた。いかにも秋らしい赤や黄色の葉をつけた木、「冬でも緑のはっぱの木があるよ」と緑の葉をつけた木、そのほか柿や栗まで、種々さまざまの木ができあがった。

子どもは朝やってくる和下張りの乾いた山に色をぬってくれる。前日の続きで、子どもたちも山を作ることは興味がついているので、「きのうの続きをしましょう」と誘えば、皆へやに集まってくる。集まったところで「山のともだち」を歌う。この歌は男の子も女の子も大好きで遊びながらでも歌い出すことがあるくらい。歌ったあと、製作の話し合いに入る。「きのうの木を作つてとてもにぎやかになつたけれど、誰もいなくて淋しい。山にももつとお友だちがほしい」というと、「きのこ。おちば」という子どもがある。歌の文句から思いついたらしい。「それもいいわね。それから。」「くま、

うさぎ」……と動物の名前があがる。そこで、秋から冬まで動物を扱った紙芝居をする。そのあと画用紙に動物をかいて切りぬく。

(結果)

皆熱心に作った。子どもたちのなかに紙芝居の絵をまねようとした者が二、三人あったので、紙芝居などしなかつたほうがよかつたかも知れぬと反省する。

(後記)

このあと三日目も引き続きこの製作をした。「山には人もいるね」「それならお家もある」「電車や汽車だつてあるでしょう」「じゃあ僕は汽車とトンネルを作る」……という具合で、子どもたちは次々といろいろな物を作り製作を發展させてくれた。

例 4

先に茶巾寿司のあき箱を、紙粘土で周りを塗っておいたのがすっかり乾いたので、模様付けをさせようと思い、朝、子どもたちが大体登園した頃(九時四十分頃)ポスターカラーを溶いて用意し、机に紙を敷いて置いた。子どもたちがそれを見て「何をするの」と聞きに来たので、私がサンプルに作って置いたのを見せ、「紙粘土を貼った箱が乾いたら模様を書きましょうよ」と誘った。すると、「僕もする」「私もする」と希望者が続出し、各々の箱を探し模様付をさせる。

(結果)

外や部屋で自由遊びをしていた子どもたちも、友だちがしているのを見て、「自分もしたい」と言ってくる。一度に大ぜい出来ないで(六人位まで)待たせておくのに一苦労、模様のように花や人形などを書く者、縞模様や色分けをする者など思いおもいに。底になる所が書きいいせいか底に手の混んだ絵等を書いてしまふ子が多い。これに平行して鬼ごっこ、縄飛、飛行機とぼしの外遊び、おうちごっこなども活潑、一時間ほどして子どももとぎれて来たので片付けかけると、また子どもが来てすると言ふ、結局十一時頃まで皆が次々と模様付をしていた。

C 楽しいことが目前に控えている場合

例 1

登園してきた子どもたちに「今日は、どんな日か知っている。」と聞くと、「知ってる。七五三だよ。」と口々に答える。そこで、「今日は七五三ですよ。だから、飴のおみやげがあるのよ。」と話すと、「わあ。」と歓声をあげてとびあがる。そこで、「だから、飴を入れる袋を作らなければね。」と言いかけると、もう気の早い子どもたちは、保育室の中を眺めまわして、出来上った袋をみつけ、「ああ、あれだ。」と走って行き、「先生、上手だなあ。」などと話し合っていた。「作りたい人は、クレヨンをだしていらっしやい。」と言ひ、

袋の紙を渡して製作に入る。

(結果)

後から登園してきた子どもたちも友だちのしているのを見て、一しょに作り、出来た子どもから外にでて遊んでいた。流感の臨時休園の為、しばらく園からはなれていたが、別に、その影響もみられず、熱心に作りあげるものが多かった。

例2

年長組の子どもたちがひと足先に保育室に入り、お店やさんごっここの準備を始めたので、待ち通しくなった年少組でも、子どもたちが「早くしよう。」と言いだした。「他のお友だちも呼んであげましょう。」と答えると、すぐあたりの子どもたちが廊下にて「お店ごっこするから早くいらっしやい。」と誘い、少しの間に全員が保育室にそろった。すぐお店やさんごっここのやり方を話し合い、ひとりひとりの希望を聞いて各店に分れて始める。

(結果)

野菜や果物を製作していた頃から、毎日「いつになったらお店ごっこするの。」と聞いていた子どもたちも昨日の帰りの挨拶の前に「明日はしましうね。」と言われて、今日を楽しみに待っていたらしく、本当にうれしそうに、お店ごっこを楽しんで過した。

例3

今日はたいへん良い秋日和、朝まだ紙粘土を塗った箱に模様を書いていない子が友だちのを見てほしいと言ってきたので、ポスターカラーを溶いてあげる。次々とまだしなかった子が集って来て書く。

今朝隣の組より「遊園地に落葉を拾いに行くがどうですか。」と誘いを受けていた。箱の絵付が一段落したので付近にいた子どもたちに「今日はお天気がいいから遊園地に散歩に行きましょうか。そして落葉やドングリを拾って来ましょうか」と話す。すると子どもたちは「散歩に行くのよ」と大声でふれ廻っている。部屋の中を片付けながらちょっと庭の方を見ると、子どもたちは帽子をかぶり行く用意をして並んでいる。遊んでいた子どもたちも片付けて次々と飛込んで来ては手を洗って並んでいる。出がけに念の為お手洗に行ってくるよう注意するともう行ってきたとの返事、何と手廻しの良いこと。

(結果)

部屋を片付けたり落葉を入れる籠や袋を用意したりしている間二十分あまり、いつもならブランコに乗ったりふざけっこをしてしまっているところを、何と、列はいくらか曲っても、ちゃんと並んで、いつでも出かけられるようにして待っていた。落葉やドングリを集めたり土手を転ったり登ったり階段を上ったり下りたり皆大喜びでこの間一時間半あまり、喧嘩もなく愉快に過した。途中バラ園のお手洗を借りたがこれもきちんと使うことが出来た。

帰ってからお弁当、この準備も超スピードでおこなわれたが抜けていたものは何もなかったように思っている。

(後記)

この散歩の落葉拾いがきつかけで、子どもたちが自分の家の方で拾った落葉を「先生はい」と持って来てくれたので、大部いろいろな落葉がたまった。そこでこれを使ってグループ別による協同製作で絵をかかせた(作らせた)。絵の内容は指定しなかったが、木や木から葉の散っているのが多かったが中には模様のようにした組もあった。

D 子どもの好きなものを選んで気分転換をさせた場合

例1

お弁当が終わったあとの自由遊びの時、ひとりの男の子が、どこから持ち出したのか身の丈ほどの竹の棒をふりかぶって、逃げる子どもを面白そうに追いまわしたり、英雄気取りで何やら氣勢を上げたりしている。男の子の中には、それに対抗するつもりなのか棒ぎれを拾ってきてからかい半分に向かってゆく者がある。放っておくとけんかになりかねないので、何か精力の転換をと思い、子どもたちの好きなかけっこでもさせてみよう、運動会の時に使った旗や障害物のゴムひもを持ってきて、「みんなでかけっこをしない」とそ

ばにいた二、三人を誘った。すぐに十人ほど集まった。棒をもっていた子どもとんできて僕も入れてと目をかがやかせている。その子どもも含め集まった子ども全部に、棒をふりまわすような危いことは絶対にしないようにと約束し、「もし、かけっこしたくなったら、いつでも旗やゴムひもを貸してあげましょう」といっておく。棒を持ち出した子どもには、もとへもどしておくように注意する。

(結果)

始めの二・三度私が審判をした。そのうちに審判をしてあげるよといってきた子どもがあつたのでかわってもららう。審判のほかに走る人、旗をもつ人、輪ゴムをもつ人が何人かきまっておよそ二十分ほど続いた。この間、けんかは全く見られなかった。

例2

午前中、遊びが何となく荒れ気味で、ころんだり、ぶつかったり、小さなげがをする子どもが、ぼつぼつ出てきたので、お弁当の後、何かに気持を転換させたいと思い、子どもたちの好きな紙芝居をすることにし、自由遊びを少し早目にきりあげて、保育室にいた子どもたちに、「紙芝居をしますから、他のお友だちも呼んできてね。」と頼むと、喜んで、すぐ呼びに行き、たちまち全員が集まった。年長組の子どもたちも、のぞきにきたので、椅子をもつていらっしやいと言ひ、お互いにゆずり合つて席をきめる。

(結果)

紙芝居は子どもたちの大好きな「ピーターパン」だったので、非常に喜んで目を輝かせて見ていた。

E その他

子どもたちをへやに集める。二学期になってから紙芝居を作って見せて下さった方が何人かあるし、それからこの間三匠の熊の紙芝居をみんなで一枚ずつかいて作ったときもとても上手にできたから、今度は一人一枚ではなく、今いっしょに坐っているお友だち同志お手伝いし合って、五人で一枚にかいてみましょうという。五人一グループの共同製作は今までに二、三度しているので、五人で一枚の絵をかくことの意味はわかったようだ。どの場面を絵にするかは私があらかじめきめておいた。順を追って七つの場面を説明し、どのグループがどの場面をかかか、かきたいと思うものに手をあげてもらおう。表紙をかきたいというグループが絶対に多い。表紙ばかりできても仕方がないので、どなたかほかの場面にかわって下さらないかと頼んだがゆずるグループがない。「それでは先生がどのグループはどここのところをかかか定めてもいい」と聞くと、一斉に「いやいや」と叫ぶ。群衆心理も手伝っているらしいので、しばらくそのまましておいた。そのうちに「先生がきめてもいいよねえ」と話し合っているグループが出てきた。ふざけ半分に「いやいや」と叫んでいる子どももまだあったが、少しおさまったところで

「みんながいやだといっていたら、いつまでたっても紙芝居ができないから机に番号をつけて一の机の人は一番始めの表紙をかき、二番目の机のひとは二番目のところをかきましょう」ときめておき、「わからないことがあったり、かきにくいところができたら、いつでも先生がお手伝いにくわ」といっておいた。つまらないのとまだ不平が絶えなかったが、一人かき始め、二人かきそのうちにグループで相談がまとまったらしく、ようやく静かになった。

(結果)

十分ほどかかって熱心にかいた。終りごろになって、五人のうち二人ほどぬけてしまったグループが二つあったが、そのほかは、できあがるまで五人がよく協力していた。

「ま と め」

ここにあげた例は、先にものべたように毎日の保育の中から、一応効果の認められたと思われるものを選んだのであって、動機の中からみて、便宜上、大体同じようなグループを選んで分類してみた。すなわちAグループは何らかの形で子どもたちの方から、何かに興味を感じて、させてほしいと要求したものをとりあげて発表させたものであり、Bにあげたものは、教師が子どもたちに経験させたら望ましいと思って計画した内容をそのまま押しつけないで提示

するという形をとることによって、子どもたちの興味をこちらの意図にひきつけてゆき、子どもたちが自分の方からやりたいと思ったのと同じような気持を起させたいと望んだものである。次にCの例は子どもたちみんなにとって楽しい行事やうれしいことが目前に控えている場合であり、Dにあげたものは、日常の観察、経験から、子どもたちの好きなものを幾つか準備して、自分の転換にうまく利用していつて成功した例である。Eは、これらのいずれとも違い、子どもたちが最初あまり関心を示さなかったものに対して無理に押しつけることなく、ある時間をおくことによって、子どもの興味で幾分そちらに動き始めた時をとらえて、子どもたちの納得する方へもっていったものである。これらを見てみると、

第一に、ある仕事（遊び）から次の仕事（遊び）へ移る場合、子どもたちの興味の方向を把握して、それを中心にしながら發展させていったとき、効果があげられるのではないか。ということが言える。（例えばAの場合は誘導の動機を子どもの発言をとりあげることによっているし、Bの場合は教師の側から示されたものでありながら、子どもたちの心には、自分の好きなものをするのだという動機づけがなされている。）

第二に、その子どもの興味は自然に示されるのを待つばかりでなく、やはり好ましいものへの関心を持てるような環境をととのえておくことが必要であるという点になると思われる。（B、C、の例より）

第三に、子どもたちは、いつも自由にほっておけばよいというのではなくて、その生活を細かに観察することによって、その場面場面により、どのような方向にもっていったらよいかを判断し、適当に自分の転換をしてゆくことも効果をあげるのに役立つのではないだろうか。（Dの例）。

第四に、教師が意図する方向へもってゆきたいと思ったとき、それをいかにして実行に移すかの技術の研究が常になされていなければいけないと反省された。

第五に、かなり余裕のある保育案をしかりたてておくことも大切であろう。その日の状態を考慮することなしに今日はこれをしなければいけないという気持ばかりで強引に押しつけてゆくことは、かえって効果を削減するように思われた。

もちろん、ここにあげたものは毎日の保育から考えれば、ほんの一例にすぎないので、この他にも地域により、また保育形態により、それらを含めた環境の相違によって、いろいろと違った例があると思うが、日々の保育の中で、あまりにも近すぎるために、とかく何ということもない繰り返しに終ったり、経験上だけの判断に頼ったりしがちな問題であるだけに、とりだしてみることに、よって、いささかなりと反省の資料ともなり今後の方向づけともなったように思う。



USIS 提供

「父親代理」が 子どもたちを助けます

ニューヨークのベルビュー病院の小児病室では、二十五人の「父親代理」が、療養中の子どものために働いています。

ある富裕な実業家は、一週に二晩、夕食をすますと病院にゆき、上着とひるまの仕事をぬぎすて、ベッドの間を玩具の汽車を走らせてまわります。彼のここでの仕事は玩具を与えることだけではなくて、自分自身をも与えることなのです。いちどきに十数人の子どもと個人的に親しくすることはできませんか

ら、彼は他の子たちには玩具を与えておいて、特に院長から指定されて、個人的な面倒をみる必要がある子どもに自分自身を与えるのです。

この企画が始まってからすでに七年になりますが、この「父親代理」の制度は、すばらしい実績をあげています。これは病院が金で買うことができない薬、すなわち愛情を与えているからです。

一九四九年にこの企画が始められたとき、それは、長期にわたって病院にいる子どもたちが、無感動な、

不活潑な、無気力な状態におちいってゆく心理的な病氣——ホスピタリズムから救うことを目的としていました。婦人の篤志家たちが、ひるま、誕生日の会をしてやったり、しょに遊んでやったりして、夜は父親たちがやってくるのです。この病院の小児教育主任のアルサンドリニ女史の言うところによると、「病院では男性の助力を必要としています。それは強い腕力を必要としているというのではなくて、子どもたちは日常の経験の中

で父親の姿に接することを必要としているのだということです。

このような篤志家の父親は、一九四九年には五、六人だったのが、今は二十五人にもなっており、もっと多くの父親が要求されています。この「父親たち」は、約束した日の晩、六時から九時まで働きます。そしてすぐにそれとわかるように、制服をつけます。

多くの篤志家による運動とは違って、この仕事は定期的に父親たちに来てもらうのに、何の苦勞も要しません。「それは、その仕事が必要ながあまりにも明瞭で、子どもたちは目にみえて活潑に反応するようになるので、『父親』たちにその必要性を説得する必要がないからなのです」とアルサンドリニ女史は云います。「それは男性の健康にもよいことです。子どもたちが待っていて、喜びの叫びをあげて迎えてくれるのは、まったくやり甲斐のあることですから」

ある場合には、ホスピタリズムは家庭でも起ることがあります。そして病院に入ることによって癒されます。ある四才の子どもは、一年間笑いもせず、話すこともしなかったの

で、嘔ではないかと思われていました。ところがこの病院に来て二月目に、『父親代理』にむかって笑いかけ、三月目に話しかけるようになったのです。こんな経験をする、大がいの男性は、毎晩毎晩訪ねて来なくなってしまう。

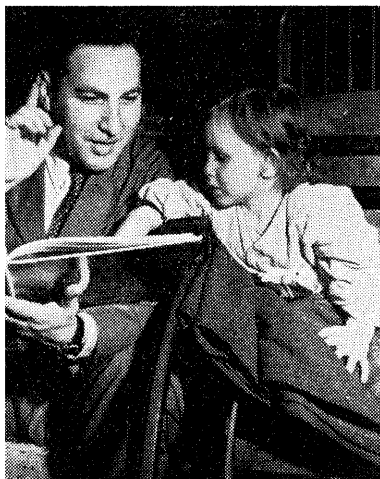
この企画は、有名な精神医学者、ゴールトファルフ博士と、スピッツ博士が、子どもたち、とくに孔児が長期にわたって病院に入っていると一種の寂寥による精神身体病状をおこし、永久に発達をおくらせたり、時にはそのため死ぬこともあるという研究報告を発表して以来、とりいられるようになった。

のです。「父親代理」それは、家庭の記録をみることは許されませんが、特に子どもが安心感と信頼感を欲しているときには、それを容易に感じとりませう。

この病院で働らくことがきまると、「父親代理」は、精神科医と心理学者によって注意深く用意された準備訓練をうけます。ですから、小児病室で経験せねばならない情緒的な問題にぶつかっても驚くことはありません。

現在名簿にのっている「父親代理」の中には、広告業者、新聞業者、衣服製造業者、富裕な実業家、大運石工、教師、自動車運転手、セールスマン、学生など、各職業をふく

んでいます。「この『父親代理』になるのは、特別な資格はいりません」とアルサンドリニ女史は云っています。「ただ必要なのは、子どもたちに対する真摯な興味と、子どもたちがその一員である社会が、基本的に友情にみちた人間の社会であることを感じさせるのと助けたいという望みとです。『父親代理』となることに対する報酬は、金で買うことはできません。ある父親たちは、ひるまの職業生活を生計をうる手段とし、病院で子どもたちとともに生活することを、人生の真の目的を果しているときだと考えるようになっている」と云っています。



創作

豆まきの夜



鈴木正子

豆まきの日にはどこのうちでも豆をまきますね。

夕方になると、あちらのうちからも、こちらのうちからも、

「福はうち おにはそと」

という声が聞こえてきます。

その豆まきの晩のことでした。街かどの電信ばしらによりかかって一匹のおにが泣いていたのです。

「えーん えんえん」

それは青いおにでした。空のお月さまはさつきから、だまってそれを見ていらっしやいました。なかなか泣きやまないのです、

「どうしたの」

っってお月さまはとうとうお聞きになりました。

おにはすると泣きながらこういいました。

「僕、泣き虫おになんだ。だけどこんやはおいだされちゃったんだ。タア坊のおなかの中にいたんだけど、豆まきの豆にやられちゃったんだ。えーん えーん。」

「ほほうそれは気のどくに」

っとお月さまはちょっとお笑いになりました。

「どれどれ、タア坊はどんな顔してるかな。」

お月さまは細い目をしてタア坊の家の中を、のぞいて見ました。いつもタア坊はたいへんな泣き虫なのです。ちよっところんだって、すぐ泣くのです。でも泣き虫おにを追いだしたタア坊はもうけっしてあしたから泣かないでしょうよ。さむい朝だって手がつめた

いなんていって泣かないでしょうよ。

お月さまは、

「ああよかった。よかった」

とおっしゃいました。

「どげどげどげ」

何だかまっくろいものごとんできて泣き虫おにをドーンとつきとばしました。泣き虫おにはまた、

「えーんえん」

と泣きました。

「何だ／＼そんなところに立っていてじゃまじゃあないか」

黒いおにはぶんぶんおこつていいました。

「ケン坊のおなかの中にいたけんかおになんだぞ。だけでもうだめ

だ。豆がいたくつていられやしないや。」

黒いおにはどんどん足をならしておこりました。

「ほほう、こんどはケン坊か。」

お月さまはほそい眼をしてケン坊の家の中をのぞきました。

ケン坊はけんかがだいすきでした。よく友だちとけんかをしま

す。女の子もいじめます。

家ではおとうとのフウちゃんとおもちゃのとりっこをしてけんかをします。

でもこんやはそのケン坊が、フウちゃんと汽車をはしらせてなかなか遊んでいます。

「かして？」とおとうとがいうと、「うん」とケン坊はすぐ汽車をかしてあげました。

「よしよし、けんかおにがいなくなったからな。」

お月さまは大きな声でおっしゃいました。

「ああ、さむいさむい」

そこに、こんどは黄いろい、おにがやってきました。ぶるぶるぶるぶる ぶるえています。

「どうしたの」

赤おにと黒おには黄いろおにのそばに行つてきました。

「あたしね、ミイちゃんのおなかの中にいた病気おになの、だけどね、いたくつて いたくつて。」

「あれ、きみも豆にやられたのか。」

と二匹のおには顔をみあわせていいました。

お月さまがほそい眼でごらんになると、ミイちゃんはかぜをひいてねていました。

でもきのうまでは熱があつて顔がまっ赤だったのにこんやはだいぶよくなつていました。

「お母さんのおっしゃることをきいてよくねていたからね。それにこんやは豆まきだし。病気おにもとうとうおいだされちゃった。」

とお月さまはおっしゃいました。

夜がふけると街かどの電信ばしらのまわりには、一匹、二匹、三匹、四匹といろいろなおにが、あっちからこっちから集つてきまし

た。

泣き虫おに、けんかおに、病氣おに、そうそうそれからいばりんぼうのいばりおに、それからよくばりおにも。タア坊、ケン坊、ミイちゃんところのおにのほかに、シン坊、トシちゃん、チイちゃんところにいたおにもいました。

「さあ、これからどうしようか。」

と黒いけんかおにがみんなをあつめていいました。

「またもといたところにもどうろうか。」

と青い泣き虫おにがいいました。

「でもまた豆をぶつけられるもの。山へにげて行こうや。」

と黄いろい病氣おにがいいました。そこでみんなはどうとう山に逃げていくことにきめました。

「それじゃあ早くいこう。」

と一・二・三でおにたちは山にむかって走りだしました。寒い寒い夜ふけのまちをどんどんにげました。

お月さまは空からそれをほそい眼でごらんになりながらアッハッハとお笑いになりました。

おにをおいだした子どもたちはどうしたかな？ きつと、もう静かに静かにねてしまったことでしょう。

豆まきの夜のおはなしもこれでおしまい。

終

(群馬大学付属幼稚園)

幼児の劇あそび集

幼稚園における劇あそびは、幼稚園教育の理論が確立するにしがたい、幼児のあらゆる生活の総合として、ますますその価値が認められてきております。

この見地から、本研究会でも、早くからこれが研究に着手してまいり、その結果を先年、「幼児の劇あそび集」として出版いたしましたところ、皆様の御好評を得てたちまち品切れとなり、永らくお待たせいたしました。このたびこの改訂が漸く再版になりましたので、ここにお知らせ申し上げます。

本劇あそび集は、二十四篇あり、みな本研究会が研究脚本化したもので付属幼稚園児に実施して非常に善ばれたものばかりです。

取材については

○幼児たちのよるこぶ童話の中からとりあげたもの……浦島太郎・舌切雀 など

○幼児のあそびの中よりとりあげたもの……幼稚園ごっこ・動物園 など

○自然や社会環境の中からとりあげたもの……花の子ども・おやすみなさい・ひよこのさんば など

○体育的なあそびを意図してつくったもの……仲よし など

○行事をとり入れたもの……クリスマス・おひなさま など

三才児に適したものを、四才児向きのもの、年長によいものなど学期ごとにそれぞれ数篇ずつとり合せてあります。

あまりに専門的にならず、ほどよいしろうとの味をもつことに意を用い、「幼稚園の劇あそび」として皆様におすすめてもよいと自任いたしております。

お茶の水女子大学付属幼稚園内

幼稚園教育研究会

〔四六判二一〇頁 頒価二五〇円 送料三六円〕
〔申込先き 幼児教育研究会〕

(東京都文京区大塚町お茶の水女子大学付属幼稚園内)

雑 想

菊・保 育



村 田 修 子

このところよいお天気が続いている。今、世の中にはやっている「かぜ」としめり気とが関係があるかどうかわからないけれども、俗にいう乾燥しきったためになお一そう「かぜ」がはやるのだとしたら、一雨ぐらいはほしいような気もする。が、勝手だけれど、今雨が降るとせっかく今を盛りと咲いている菊が色あせてくるのはどう考えても惜しい。大輪の白・黄の花が水をいっぱい含んで首うなだれてしまうのはあわれである。見る人はともかく、これを作った人の身になるとしても立ってもいられないらしい。うちの狭い庭で菊を作っている父は、日中の風・雨の変化に對してはもちろん、毎夜天気予報を聞いて雨の降りそうなききは、鉢物は軒下や家の中にしまいこむし、地植えのものには考えただあげくビニールの袋を花の上にかぶせてからねる。始めのころは「菊にレインコートをかぶせる」とうち中で笑っていたが、私はこのごろその気持がわかるような気がする。菊は一年中手がけなければ秋にその成果を見ることはできない。「秋になりて菊作ろうと思ひけり」である。

この早急に成果をあげることができない、ということと、こま

ごましい世話 ということは保育にも通ずるものをもっている。そしてこの作った人がかんじるその身になって、みるということも小さい人たちを預る私たちにとってどんなに大切なことか、そしてまたどんなにむずかしいことか、しみじみと思う。

不幸にして私たちおとなは、誰でもがとおってきた幼児のころのことは大体覚えていない。砂利道でころんで膝が痛いとき、なんといいてもらったことが一番うれしく、勇気をふるいたたせられたか、いたずらをしたとき、お母さんになんといわれたことが「もうそういうことはやめよう」とか「悪いことだった」と一番思われたかなど…… こういうことを思い出すことができたとしたら、どんなに毎日子どもたちに満足を与えることができるであろうか。私たちは毎日純心そのもの子どもと接しているから、ほかの世界のおとなの人よりは幾分童心を失わないでいるつもりではあるけれども、「忘れてしまった幼児の世界」と、「毎日流れている保育の中のいそがしさ」のためにその身になってあげられないことがたびたびある。

このごろ毎日幼稚園にかかってくる欠席のことわりの電話はたいてい「かぜをひいてねつが四十度あるとか、咳がひどい……」

というのが多い。こういう話しを聞いた場合、「たいへんですね、おだいじに」とか一応はお見舞も同情したことばもいえる。ところが去年高い熱の続いた経験をもって以来、こういう話を聞く、その病気によって苦しんでいるお子さんの姿を、自分の苦しみを思い返しつつ本当にその身になって同情することができた。

前の気持とあとのそれは、外見にはもちろんわからないし、ことばで「どうちがう」とはいえないけれど、なにかぞくぞくと身に迫ってくる感じから考えてみると、前のは単にそういう事がらに対する一種の形のようなもので、正直のところことば・礼儀づラス幾分の同情であった、と思われてくる。

この身になる、ということとともに、自分自身が経験する、ということも幼児を保育するにあたって、先生・子どものどちら側からいっても大切なことである。

うらやましいこと

こどもたちは中学・高校になると、おとなのように経験をへたものではないが、その年齢相応の確固とした人生観・社会観というものをもち、大体において親はけいえんされる立場におかれてくる。

この秋の芸術祭参加作品で文部省推せん映画「娘は娘母は母」の中でも、自分のことを少しもかまわず犠牲的に家族のものにくくしている疲れた母親を腹立たしい思いを含んだ目でみる娘。自

分の衣服のことより娘に新らしいものを、というみすばらしいかつこうをした母と一しょに歩くことをいやがる娘・それに気がついて身なりを整えた母に、自分から寄りそって一しょに肩を並べて歩く娘の幸福そうな顔…… こういうのがあったが、こういう人たちもおとなの言うこと、とくに先生というおとなの言うことをただひたすらにきいてくれる時期があったわけである。

それだけにこの時期をあずかる幼稚園では、その効果をあげるために家庭と密接な連絡をとりながら同じ目標に向っていく必要がある。そこで幼稚園の先生はより以上に親と接しよくをもつようになる。年齢が小さければ小さいほどそれは多くなる。

幼稚園でいろいろの連絡をするのは母親が大部分であるが、その中にはいろいろの考えかたの人がいる。母親は大体自分の子どものこととなると夢中といっていらいらい一しょうけんめいであるが、私が経験した親の中に自分の子どものことはもちろんなにつけても熱心であるが、社会生活をしていく上の常識的なことで子どもがらわきまえていなくてはならないこと、例えば、乗物の中でひどく騒ぐとか、腰かけの上に靴のままのつてしまおうとかいうような場面をみたときなど、自分の子ばかりでなく、子どものお友だちにも全然知らない子どもにもその言動について注意したりとめたりする人があった。

ところがほかの母親と話しあいをしていけると、その話しの中で、他の人の子どもにそういう扱いをすることに対して批判めいたものがいつとはなしに語られることがあった。その批判の大部

分は「おせっかいである。出すぎている。あの人はこわい。しっかりしている(あまりよい意味ではない)。自分の子が注意されてしゃくにさわる。」というようによくないものばかりであった。もちろんそういうことも、他の人に悪い感じを与えないようにできたら一番よいので、やりかたもあることは思うけれども、それをきいて私は、そういう批判しかできない片方の人についても、その人というものを知ることができた。私はよく冗談にそういう人を典型的な日本人という。

この、自分の子を一心によくしようと考えることは日本人のよい点かも知れないけれど、なんとという狭いよさなのだろうとも思う。

この小さい国の中に、世界でも上位の人口密度をもつ日本では、他の人のことなど考えていられないため、しらずしらずのうち日本人の身についてきてしまったのかもしれないけれど、そのどっちを向いても人につきあたる中であつてこそ、ぶつかり合う人たちのことも考えなくては結局自分にそれがかえってくる。みんなが広い心をもってこそ進歩や発展があるといえる。

この狭さについて男の人と女の人の場合を考えてみると、残念ながら女の方が「典型的な日本人」が断然多い。世の中にいろいろ仕事がある中で、幼稚園も女の人の多い社会である。そこに住むわれわれは次の時代の子どもを育てるのに広い心であり、そして広い心をもった子どもを作りあげる人でありたい。

こんなことを考えていたので、最近読んだ本はひどく感銘をう

けた。我が意を得たり、とうれしくもあり、それが外国のことだつただけにうらやましくも思った。

それは日本の若いビアニスト(十代)がウィーンで勉強している日記である。そういう人たちの生活している家庭は特別の知り合いというのではなく、普通の家庭の世話をうけるらしいが、その母親がわりになる人たちはよその家の人、外国人とかいう区別をせず親身になってすべてに心をくぼり、温い気持でつづんでいることがよくわかるが、その中でもきちんとしてはならないことは誰にでもようしゃなく厳格とみえるまではつきりしていることは感心するばかりである。少し抜すいしてみると、

・おなががいっぱいになってしまったので残したらムッテイ(母親)に「全部たべなさい」といわれた。

・「〇〇はピアノばかりでなくアイロンをかけることもできなくてはいけない」

・用事でおそくなると必ず迎えにきてくれる。あるとき行きがちがいになってしまった。ムッテイは怒るようにして「いつも〇〇が出かけるたびにとても心配しているのよ、ウィーンにいる間は私がお母さんなのだから監督しなければいけない」といった。

・日曜日にはみんなの休養日という意味でピアノはひかない。あるとき間に合わないので練習していたら、「きまりは守りなさい」と注意された。

・ムッテイが綺麗に掃除をしたあと「じゅうたんがきれいになったのだから、あまり何度も歩かないように。自分のへやから持っ

てきたいものはまず考えてまとめて持っていらっしゅい」とたいへん合理的な注意をされた。……

こうして書きぬいてみたら、感銘をうけたときの味はあまり出てこなかったが、その本全体にあふれているのは人種を超越した温かい人間味であった。

他人の子に対しても、「自分の祖国の子どもである」と考えるという話は、外国の旅を経験した人によってしばしば語られることである。私ももしそういう経験をしたらもっともっと積極的に行動できるかも知れないけれど、今のところ前にあげた積極的なお母さんのようにしたり、そういう話をして、その真の意味を正しく理解してくれる人はごく少ない。大ていはその裏を考えたたり、変っている、ぐらゐの批判しかされないことを知っている、ただ外国の身についた習慣をうらやましく思っている。

道徳教育

「習慣」といえば、最近盛んに論議されている「道徳教育」について書かれている新聞記事をみてちょっと愉快に思った。

それは「……道徳教育といっても、目下とりあげようとする事項は、日常のしつけ・習慣に関することや、社会生活をする上で心得ておくべき事がらである……」というようであった。どの種類の学校でも、学校は単に学問の知識ばかりを与えるところでは

なく、その知識をつみ上げていくものになる人間をつくることもその使命の一つのはずである。たとえば音楽について考えると、きいて美しくいと感ずる感性を十もっていけば、十の得るところがあるし、五の人には五だけのことしかないわけである。その感じる力というものは、知識だけではどうするわけにもいかない。

年齢の大きい人たちを相手にしていると、入学とか、就職とかいろいろの競争がからまってくるので知的な方面のことが主になつてしまうのかもしれないけれど、そういう競争、とくに就職などは知識ばかりでなく、その人となりということが大きなポイントとなる。そういうことは急に身につけようと思つてもできるものではない。前に言ったように、日本の社会の中では、なかなか外国のように誰でもが導いてくれる、というわけにはいかないから、学校のように形をもった中にいる間に指導にあたる人が考えてやり、そして新しいことにあたつても自分で適当に判断できる常識は身につけてあげたいものである。

その点、幼稚園という世界は「生活指導」ということが大切で、ここでの主目標となるものであるから、ことさらに「道徳教育」とさわざたて固苦しく考えないで、当然のことのようにしていられる私たちにとっては気易いことである。

また幼稚園で希望していたように、ずっと一貫して教育をされるというわけになつたのでたいへん喜ばしいことと思つし、得意顔がしたくなるというものである。ただこれが理論だけに終らな

スイス(トローゲン)にて

平井信義



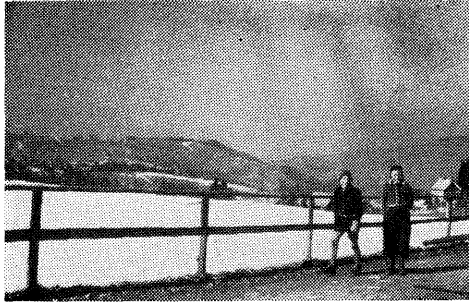
ベスタロッツチが貧しい子ども
の肩に手をかけているあの
有名な銅像は、チューリッヒ
市内にある。駅から湖までま
っすぐ走っている街路に沿っ
て右側に、小じんまりした広
場があるが、木立に囲まれた
その広場のまん中に、銅像が
立っているのである。

ヨーロッパの国々で、ベス
タロッツチの名前ほど、子ども

に關係ある施設や組織につけられているものはないだろう。私が留
学していたケルン大学の問題児の病棟も、「ベスタロッツチ病棟」と呼
ばれている。西ドイツの保育協会も、「ベスタロッツチ・フレールベル
協会」という名前がついている。方々にベスタロッツチの子どもの村と
いうのがある。スイスのトローゲンにも、同じ名前の「子どもの
村」があった。私がお子どもの村を訪れたのは、山々には雪が輝
き、丘々にはむら雪が残っている三月の半ばである。

実は、この「子どもの村」については、ある場所さえも知らな
かった。ベルンの児童相談所を見学した時、ヘバーリン女史から「是
非いってごらん下さい」とすすめられたのが、トローゲン行きを決
心させたのである。短い旅の日程であったが、私はチューリッヒか

ら汽車と電車で東へ二時間も走った。スイスでは東の端、オーストリアとドイツの国境に近い丘にトローゲンがある。ツェルマツトという町で汽車を降り軽便電車に乗りかえたのが午後三時。右下遙かにボーデン湖の眺めがひらけ煙立つように湖面や湖岸の町々がかすんでいた。鉄道の路線に沿うように人家が立並び私の視野を遮ったが、その家並みは三列か四列で、それもしばしば広い牧場の柵に隔てられて、再び広々としたボーデン湖の眺めを楽しむことが出来た。



小一時間も登りつめて、終点にトローゲンがある。ホテルとは名ばかりの肉屋の三階に荷物をおろしたのが、四時近くであつたらうか。そのままの足で、ホテルの階段をきしませながら戸外に出ると、直ちに「子どもの村」に向つた。

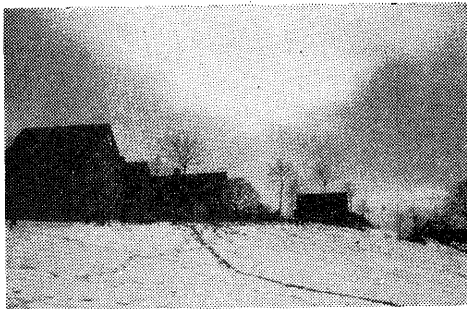
くねくねと曲つた村の坂道を四・五分も登るともう村はずれである。太い榆や楓の並木道が続く。それを抜けると、急に視界が開けた。向いの丘にはうねうねとコンクリートの道が狭い、丘から丘へと続いていく。その丘の左の

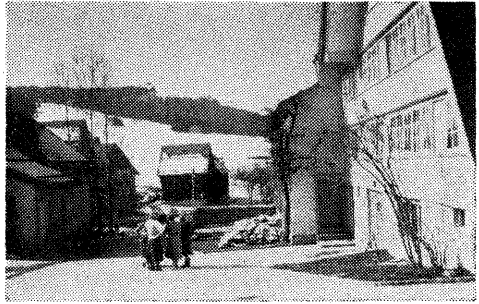
裾は、そのまま西ドイツへ、奥へ幾重にも丘をまたいで行けばチロルの森へいくはずである……。私は薄日の射している空を仰いで深呼吸をしてから、柵にもたれた。その脇を、顔の皺の刻みの濃い老人がゆっくりゆっくり歩いていく。二・三人の学童が老人を追い越していった。

私は彼らの後姿を目で追いながら、これからさらに登っていく丘の上を眺めた。淡い日射しの西日を背に受けて、いくつかの建物が立っている。峻しい屋根の勾配が、流れていく薄墨色の雲の中にくっきりと見える。そこに通ずる道の両側には、牧場を仕切る木の柵が右に折れ左に折れして続き、早足の子どもたちと、背を丸くして後を追う老人の姿が、次第に小さく登っていくのが見え

た。さつと冷たい風が吹き下してくる。雲が寄せて日射しを遮る。たちまち雲が散つて、日射しが明るむ。——そんな天候の夕方であつた。何か峻しさを感じさせるような暮間近かであつた。

私は外套の襟を立てながら、柵に従つて丘を登り始め





た。登っていく程に丘がひらけて、下から見た家々の他に、点々と幾つかの家が現れてきた。しかし、さきほどの老人や子どもたちは、どこに消えたのだろうか。全く人影のない丘の上に到達したときには、最後の日射しが、家々のガラス窓に当って、羽ばたくように赤々と揺れていた。

女の人影が振向くと、エプロンで手をふきながら近寄って来た。

「何か御用ですか？」とドイツ語で尋ねたので、私は来意を述べた。次の建物に事務所があって、そこに村長のビル氏がいますから、訪ねて下さい」といった。村長というのは「子どもの村」の村長である。

相憎、ビル氏は不在で、明日は必ず来るから、十時に来てほしいということであった。しかし、「もし宜しければ、ご案内しましょう」と、男の事務員の人は、若い女の人を呼んだ。プロンドの髪、目のくるくるした可愛らしい女の人が、出て来て、私の先に立って事務所を出た。「ここには百八十人の子どもがいます。八カ国か

ら来ているのです」と、彼女は歩きながら説明した。「一軒がイタリー寮、イギリス寮、ギリシャ寮と、その国々の子どもを収容するようになっていのです。そして、寮の先生は、それぞれの国から選ばれた方が、一家で来て、子どもたちの教育に当たっています、——静かな声は、私の

耳にしみ込んで来る。

「子どもは、どのような子どもなのですか？」

「各国に選衡する組織があって、そこで両親のない子どもとか、不幸な子どもを選んで、ここへ送って来るのです」

「どこでお金を出しているのですか？」

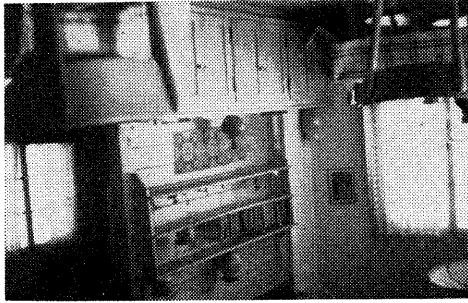
「スイスです。『子どもの村』の組織委員会です」

そう言いながら彼女は、イタリヤ寮の戸口をあけた。中には子どもがひとりもいなかった。「何か作業に出かけているのでしょうか」と弁解するように言いながら、部屋から部屋へとドアを開いては見せてくれた。木造の家であるから、立派とは言えないが、きれいに整頓されていた。一と部屋に二つ宛ヘッドがおいてある。模様様のベッ



ドカーパーがかけてあり、枕元の机の上には、黄色い花が活けてあった。図書室もある。ピアノのおいてある部屋もある。

「こうした部屋の作りは、出来るだけ家庭的な雰囲気を出すように努力されているのですよ」と自慢そうにいった。いずれにしても、我が国の養護施設とは、何という開きがあるのだろうか。こうした施設を見るにつけ、ヨーロッパの町々を歩くにつけ、ドイツでの生活を重ねるにつけ、いつも泌々思うことは、日本の貧しさであった。すでに暗くなり始めている坂道を下りながら、再び日本の貧困を思い返した。

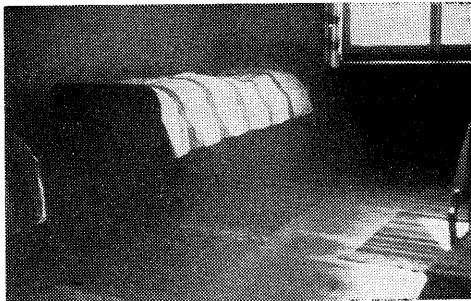


肉屋の三階の夜は、電灯も薄暗かったので、木の細根のように巻

いた土地の煙草を一本ふかすと、まだ八時半というのに床についてしまった。ピールの酔も手伝って、すぐ寝付くには寝付いたが、十時半頃に目がさめると頭が冴え返り、なかなか寝付かれなくなってしまう。十五分ごとに時を告げる教会の鐘の音を心待ちにしながら、自分の将来を日本の子どものためのどのような仕事に献げるのが、自分の能

力をもっとも生かすことになるのであろうかと考えた。研究にたずさわりながらも、お前の研究がどのように子どもたちのために役立っているのか」という声が、いつも背後から聞えてきて、不安に思う日の多かったことを思い出した。ことに、養護施設を見学したり、そこに遊ぶ子どもたちを眺めていると、きまって蘇ってくる思いであった。友人の医者たちが、子どもの脊骨に針をさしたり、注射をしたりして研究の業績を挙げているのに、心理の友人たちが、子どもの実験を重ねているのに、私自身にはそういう営みを持ちながらも、いつも不安に感ずることであった。そんなことを考えながら、ついに二時半の鐘の音をきいた。

翌日は、からりと晴れ渡っていた。ピル氏は私の訪問を待っていてくれた。日本からここに来た人は、貴方で二人目ではないでしょうか——訪問帳をめくりながら、二年ほど前に小学校の女の先生だかがちょっと立寄られたとピル氏はつけ加えていった。「貴方のように、泊りがけで見に来るかたはいませんよ。」といてから、私の仕事などに



いて質問した。

私がトローゲンまでやって来たいきざつを聞き終えてから、幾冊かのプリントも渡しながら「子どもの村」の大略を話してくれた。

「昨日も見せていただき、本当に羨しくなりました」と私が言うと、「いや実は、なかなか難しい問題を背負ってしまっているのです。

ここでの教育のねらいは、それぞれの国の子どもたちに愛国心を養うとともに、国際人としてお互に協力し合う気持を養おうというのです。ところがこうした理想はなかなか実現されない。それには、

一つは先生の問題があるのです。それぞれの国で選ばれた先生ですが、つい自国の子どものことだけに熱中するのですね。国際人として協力する気持を養う点ではなかなか難しい。また、ホスピタリスムス（施設病）の危険です。従来、独り者の先生が来ていました。が、夫婦で一しょに来てもらって、夫婦で住み込んでもらうようになってから、非常によくくなりました。ただ、先生に子どもがあるのと、孤児たちが嫉妬心を起すこともあったりして、何もかもうまくはいきませんね。それよりも、今一番困っている問題は、国際理解をどのような形でおこなうかということです。実は、いま、ギリシヤの子どもとイギリスの子どもが対立している。同じ教室内で歴史の教育をおこなっているのですが、ギリシヤの子どもは、イギリスの植民地が独立しつつあるのは当然で、イギリス帝国の今日の繁栄は、それら植民地からの搾取によって達成したというのです。ところがイギリスの子どもは、イギリスが植民地から各種の資材を手に入れたのは認めるが、その代りに近代文明を与え、植民地の国々の人々の目をさましたのだと言って譲らないのです。貴方なら、これをどのようにして理解・調和させるでしょうか？」

私は返答に困った。わが国の教育の中ではほとんど問題にならないことだったからである。

「ここで養育された子どもは、成人するとそれぞれの国に帰って、福祉関係の仕事で指導的立場に立って、国際間の交友と平和を呼びかけてもらいたいと願っているのですが……」

ビル氏は、なん度もこの点を強張した。ヨーロッパという広くもない大陸に数多の国々がしのぎを削っている。国境線は戦争のある度に動いている。その実感をそれぞれの肉体の中に持っている子どもたちが平和の願いをどのように実現するかには、日本のように島国では想像できないほどむずかしい問題である。我が国のおとなの「平和論争」は、その点でただ夢を論じ合っているようなものではなからうか。幼い時から、正しい国際理解を養い、真の平和を願う人間に育てるには、全世界の国々の教育がどのような方法を見出すべきであろうか。私は考えのまとまらぬままに、ビル氏が招いてくれた昼食の食卓に席を移した。

× × ×

温室を造ろう

松村義敏

A、温室がなぜ必要か

植物でも動物でも、その生育する土地の温度に適応していきのこってきたものであるから、極端にその適応性を異にした動植物を育成するのは、とくべつな方策がかんがえられなければならない。こうして熱帯に育つ植物を、温帯ないしは寒帯で育てようとする場合に、温室を造って、この中に栽培するのである。ところでこれまで小規模に幼稚園や小学校などでこれを実施しているところも、そうとうあるようであるが、大規模なものは学校ではできないので社会教育施設や大学の付属などとして設けられたものを一般に公開して、観覧に供されてきたのである。

幼稚園のみならず、小学校でも、自然研究において、熱帯植物を保存育成し、また、とくべつに注意をむけて観察するにはこれらの社会教育施設またはそれに類するものを、とくとき利用することだけではものたりない。

そのわけは、同じ観察でも、手もとにおいて常時、それをみていて、たんねんに観察指導がされるのと、たまにいつて、よその施設をすどおりしてみるのとでは、観察の主体性にかくだんの相違がある。いわんや、このような社会施設の恩恵にあやかれない地方が多い現状にあつては、なおのことである。

自分がまき、自分のみじかに育っていくのを見て生活することは、花壇や、一般戸外とどうように、温室においても指導効果をおびるのによいことである。この意味で、温室はもはや単なる装飾的のものでなくて、子ども新しい遊びの場であり、観察の場なのであり、運動場に設置されている種々の遊具とどうように、自然観察上の必須設備といつてよい。

もともと温室は、自然研究がさかんにさげられるようになったので急に必要になったのではなくて、幼稚園に自然観察の必要が認められたときから必要な設備であつたのであ

る。けれども費用はかかるし、その必要を認めて、興味をもって管理する能力のある人がえられなかった。——極言すれば、保育が自然研究をわすれたかたちであつたために、他の設備に比してたちおくれた観があるといつてよい。

花壇や畑をつくるのは、その土地によく育つものの育成観察の場をつくることであり、温室をつくるのは、容易にその土地にみられないものを撫育することのためであるとかんがえてよい。

B、温室がどのように利用されるか

1. 生態博物館として

すでに述べたように、温室はまず熱帯植物としてめづらしいもの、たとえば洋蘭のようなもの、葉の特異ないわゆる観葉植物として、サンシビレア、クロトン、カラジウム、ペゴニアなど。睡眠植物として、オジギソウやマイハギ、さらに食虫植物のウワボカズラ、ハイジゴクや、サラセニアの類を保存育成して、生きた博物館として利用するのが一つの道である。

2. 幼稚園行事と関連して

もはや、クリスマスや母の日は、キリスト教にかぎらず一般幼稚園でまもられている年中行事である。そこでクリスマスにもちいる

狸々木のようなものを早いに温室にいれて育てると、ちょうどクリスマススの時期に幹の先の葉が赤くなって花のようになる。これは都会でも、かならずしもどこでもえられるというものでないから、温室があればおおいにやくだつ。

母の日にもちいるカーネーションも、造花をもちいたのでは生氣もないし、興味も小さい。むろん造花の工作としてかんがえればべつであるが、店頭で求めるとなるとかんがえものである。そこでこれをみずから温室でつくつたものもちいるようにしてはどうか。

雛祭りの節句は太陰暦ですると季節が一致するが、卒業と関連して太陽暦でおこなうことになっている。そこで桃の花も季節がずれ。したがって、桃を早く咲かせねばならぬことになるが、このような場合温室が利用される。

3. 動物飼育のために

熱帯魚はもちろん、その他の動物でも、温室があれば、冬季にもっと活潑な活動をみることができる。

4. 冬季の観察のおぎないに

冬季は、冬季としての自然物があるにはある。しかし材料がじゅうぶんではない。したがって、もし温室があれば、冬季の不足をおぎなうことができる。

5. 室内環境を美化するため

保育室にかぎらず、幼稚園内部の全般にわたって、花をもって飾られることは、つねづねこころがけられていることであるが、ときに応じ、ところに応じて温室植物をおいてあることは、またひととき興味深いものである。とくに冬季、花の不足する季節には、短時間温室よりだして裝飾にもちいれる。たとえば、デンドロビウムやシプリベジウムのような比較的丈夫な洋蘭や、ペゴニア、シネリア、プリムラ、グロキシニア、シクラメンなどがこの目的をはたすによいものである。

C. 温室の規格と管理

1. 幼稚園の温室の規格

幼稚園の温室は、だいたい最低四・五坪から六坪ぐらいでよいとおもわれ、前者の場合、中九尺に長さ三間ということになる。半鉄骨木造とすると、坪あたり二万五千円—三万円のできるの、十五万円ぐらいはみなければならぬ。形は、建物の南面の壁に接続せしめる場合には片屋根式にし、独立の場合には両屋根式にする。後者の場合はむねが南北にはしるのが適当な位置である。

植物をのせる台すなわちベンチは、幼稚園の子どもに適当な高さにすることをわすれてはならない。

2. 温室管理の概要

温室の世話をする人が、べつにいてもいなくても、幼稚園の先生がその管理の概要をこころえていて、主体性をもって、子どもの活動の場とするのでなければ効果がすくない。温室の世話については、まず暖房についてもっとも安くあがるものかんがえるべきで、たとえばレンタンのようなものでもじゅうぶん効果をあげることができる。また余裕のあるところでは、ガスや電気をもちいるのもよい、そして植物の耐寒最低温度を確保することがたいせつである。すなわち、十度以下にしては絶対だめであらう。

つぎに、温室では通風をよくし、ガラスがくもらないように窓を適当にあげて温床と湿度の調節をする。それから灌水と施肥は、花壇の場合どうよう、いつの場合もわすれてはならない。灌水量は植物によってことなるし、また植物によってはわざわざ葉の上から灌水するものもあるし、グロキシニアのように葉にかけてはならないものもある。

要するにすべての管理は、子どもとともにやれるようにする。温室は一つの新しい子どもの遊び場である。

(頤栄短期大学)

保育の工夫

お山づくり



長谷幸枝

九月二十六日 木曜日 晴。研究保育の日でした。この日の共同製作「お山づくり」について書いてみたいと思います。

私の扱った幼児は付属幼稚園五歳児の組（男子十八、女子十七）であり、幼稚園の最年長組です。幼稚園生活も二年あるいは三年目であり、経験内容も多く、友だちどうしの結びつきも円滑に思われまわりました。したがって要求内容も相当に高く、クラスの村石先生からも御注意があったように、私の計画についても子どもたちの要求を満足させるもの、あまり簡易すぎないで子どもたちが一生懸命工夫するようなもの、更に子どもたちが自分の考えを生かして楽しめるようなものでなければならぬと思いました。一日の重点として何をするか、研究保育でありますから、はっきりとしたものの方がよいと考え、製作にしようと思われました。

製作に「お山づくり」を取りあげた動機としては、夏休みがすんだばかりであり、こ

のクラスではこんなことをやっていたのです。夏休みの話合い、つまり休み中自分の一番楽しかったことをひとりずつ前に出て友だちに話してあげる。休み中で一番楽しかったことを絵に書いてみる。こんなようすを見ていると、海で遊んだこと、山に登ったこと、いなかへ行ったことなどが一番楽しく印象に残ったことのように思われまわりました。その後村石先生の御指導によってとてもすばらしい海の共同製作ができました。

ラシャ紙二枚に絵の具で波、砂浜を書きそこに思い思いの魚・船・人・貝などを書いたものを切りぬいてはりつけたものでした。見ていると楽しくなるような海で子どもたちが喜んでやったようすが目に見えるようでした。山を楽しんだ人は海を楽しんだ人より少ないようでしたが、山に登った人の印象も表現させてあげたい。山に登った時のあの気持の良さ、そんな山の楽しさも子どもたちに知らせたい。こんなことから、今度は山をやってみようと思えるようになって

たのです。子どもたちが語った山、書いた山は箱根・富士山などでした。これで山をつくろうということに決めましたが、山は山でもどんな山にしようか。これについてはなかなか満足はいく考えが浮びませんでした。大きな紙にみんなで山を書き、そこに好きなものを書いてはるといふことは、一番先に考えられましたが、この方法はやりそうもない。そこで次に考えたのは、山にはるものを立体的にしたらということでした。例えば、蟬でも、書いたものをはるのではなく、胴もつけて立体的にし、それをはりつけたら少しは面白が出るのではないかと思いました。ただしこれでもやはり変化が少なく、もっと良い方法があると思われました。そして実際に山を作ってみようと思っただけです。本当の山のように作れたら、子どもたちもきつと喜んでくれると思います。自信ありませんでしたが、とにかく山を作ってみようと思い、一応こ

んなふうには計画をたてました。高さの異なる山を二つ作っておく。そこに子どもたちが絵具で色をぬり、木を植えたり、動物をはなしたり、池を作ったり子どもたちの好きな山をつくりあげていく、山について考えていることを表現できるようにしよう。

そこで準備にかかりました。

・ボール紙二枚(縦65cm横78cm)で山を二つ作る。

山の高さについては、ボール紙の大きさを考えて、山らしく見えるように適当にしました。すると、底面の直径が約六十cm、高さは約二十八cmと、十四cmほどのちがう山が二つ出来ました。案内頭文でおしてもつぶれることはありません。

・山に白のラシャ紙を一面にはって絵具のぬりやすいようにする。

・二つの山を縫ってつなげ、つづいた山にする。

・山の周囲に畑や野原をつくるため、保育室の机二つを合せ、そこには一面に白のラ

シャ紙をひき、その上に山をのせる。このことは準備していくうちに思いついたのです。先生からも助言をいただきましたが、この方がいっそう効果があると思われました。これで山はでき上がったわけですが、山につける方法として考えたことは、なんといっても立たねばつまらないということでしたので、第一に立つこと、第二に子どもたちが好きなところへつけられることを条件として考え、ペープサートの方法でつくり、これを山にさすことにしました。ペープサートは前にしたことがあり、ちょっとやりかたを教えられると思いましたが、はさむ棒はひごにし、好きな場所にさすことができるよう千枚通を使わせて穴をあけることにしました。千枚通は危険かとも思いましたが、使う前に約束をし、よく注意していれば年長組のことですから大丈夫だと思えました。

こうして「お山づくり」の準備をしましたが、この「お山づくり」については、その

日まで誘導としては何もしてありません。

当日の準備については

・お山を用意した机を出しておく。

・絵具が使えるようにしておく。色は緑・

黄緑・茶・水色の四色。

・ひごを長さ13cm、10cm、7cm、に作って

おく。

・千枚通を三本用意する。

・画用紙を二分したものを用意する。

次に当日のようすを書いてみたいと思います。

お山の机を置き、子どもたちはこれを見て先ず何というだろう、興味を起こしてくるだろうか。誰も知らん顔していたらどうしようなどと不安な気持ちで登園してくる子どもたちを待っていました。ひとりふたりやってくる人はすぐ山を見つけて物珍らしそうな顔をしました。そして「先生これ何」と尋ねます。私は「お山よ」と言ってしまうくないことにし、子どもたちが何か想像するのを待っていました。興味を長く引

いておきたいとも思ったのです。「これ何かしら真白ね」などと少しことばをはさまますと「山みたいだ」「そうだ山だよ」、富士山が高い方だ、「エベレストはもっと高いよ」などみんな山を想像し、友だち同志山を囲んで活潑に話合いがはじまりました。中に女の人など「帽子みたい」と云った人がいて面白いものを考えたと思いました。人数も十人余りになった頃時期をのがしたら、もり上ってきた興味も消えてしまうことになりそうですので、種をあかし次の段階に進むことにしました。

「お山に行ったことあるかしら。これお山なのよ、真白なお山ではおかしいわね、みんなでいいお山つくりましようね」と話しかけると、「先生色ぬるの僕にやらせて、」とたくさんぬり手が名乗りでましたので、時をはずさず絵具の用意にかかりました。「一色をふたりでぬることにし次々と交代でましようね」と話合いました。変化は後のペープサートでつける計画ですので単

純な山にしたいと思っていました。「お山にはどんなものがあるかしら」と道や川を思い出させ、道は茶色、川は水色、畑、野原などを緑・黄緑で好きにぬっていくことにしました。子どもたちはおとなのように躊躇することなどなく、すぐにすごい早さでぬりはじめました。どんな山ができるのだろうかとしばらくは期待と心配のいり交った気持ちで傍観しているといった風でした。お山ぬりに参加した人は十五・六人だったと思います。私がことばをはさむ余地もないほどどんどんぬられていき、真白な山が池や川があつて、いたるところに道のある面白い山に変つていきました。友だちどうしの話合もおこなわれ衝突もなく進みました。

お山ぬりも終りに近づいた頃、外で自動車遊びをしていた人、保育室でおまごとしていた人などに話しかけにいきました。「お山がともきれいになったのよ。道もできていしお池や川もあるのよ。」そして見に来た人たちに前もって用意しておい

た兎と木をとりだし山にさして見せました。「お山がさみしいでしょう、皆さんでにぎやかにしましょう」と用意の紙とひごぎを持ち出しました。ただしお天気もよく遊びに夢中になっている人が多くすぐには飛びついてきてくれませんでした。さみしい山になってしまいそうだと心配しながら二、三人の人たちと作りはじめました。やり方を知っているので作り上るのも早く、山にはすぐ木などが植えられました。そのうちそれを見つけて何か自分もつきたいと思ったのか、参加者がどんどん増えてきました。いれ代りたち代り二十人ほど参加し、山は随分にごやかにになりました。どんな物ができたのか書いてみますと、木・花・兎・兎の家・蛇・亀・人（山登りする人、木を切っている人、ボートに乗っている人）橋・家などで多い人は五つぐらい作り全部で四十八が山につけられました。一つ一つ異なった表情がありますので見ていて楽しいものでした。書くことよりも書いたものを山

のどこにさそうかと考え「僕の家はここだ」私の兎は「ここよ」と好きな所にさすのが楽しいようでした。橋などはささず、山と山のつなぎ目を利用してかけてあり、工夫していたようです。こんなようすで山はでき上っていきました。

時間は色をぬりはじめてから一時間ぐらい、自由遊びと併行しておこない大体の人がどこかに参加しました。

これが共同製作「お山づくり」のようすです。

この後お山のほりを今度は動きで楽しみたいと「お山歩き」のリズムをしました。

この製作について反省させられました。ことは、私が子どもたちにひっぱられてしまっていたようであったことです。子どもたちの考えを生かすにしても、もう少しことばをささみ指導的にした方がよかったのではないか。子どもたちの作ったものにして割合種類が少なく自分が作っておいた兎と木が割に多かったことを考えても何か

助言があったなら、もっといろいろな種類ができたのではなかったらどうかと思います。適当な時に、適当な助言や励ましを言うてあげるとは難かしいが大切だと思いました。

次に書いてみるとたいへん円滑に進んだようですが決してそうではなく、多くの人が見ている手前もあって子どもたちと一しょになって「お山づくり」を楽しむということよりも無事に山ができればよいようにと考えていたのではないかとことです。

また一日の保育をするために、その準備はたいへんなのだと今更ながら思いました。ただし準備ができていれば子どもたちはきつと興味をもってくれるものだと思います。子どもたちはたいへん楽しそうに、そして興味をもってこの製作をしてくれましたのでとても嬉しくやり、甲斐のあった日でした。多くのことを経験し、いろいろなことを学んでいきたいと思えます。

動物園への遠足と反省

吉 田 美 智

返る十一月七日左記の要領で遠足をおこなったが、それについての反省をまとめてみました。

一、場所 大阪市天王寺動物園

時間、九時二十分～十五時三十分。参加人員、二年保育三十五名、

一年保育四十名、それに保護者の

希望者七十四名 職員六名(内先生は二名)

二、現場における指導と反省

当日はさいわい良い天気恵まれたが、風がつめたかった。やはり時季としては十月中におこなった方がよいように思った。集合は奈良駅に汽車の発車前二十五分、乗車時間一時間、下車駅より徒歩で約十分。動物園に着く。まず幼児と保護者が二列に並び見学を開始す。人数の関係で説明が徹底せず親まかせになって困った。こんな場合、保護者を少なくすること

も考えられるが、参加希望者が多いので、やむなく全部同行した。

現場指導の点から来年からもう少し隊形や区分けを考える必要があると感じた。中食は五十分の自由

行動を許したが、二三の保護者が売店で玩具類を買って園児に与えていた。事前に保護者に対する注意を徹底させておかなかつたのは失敗であった。また時間の配分が適切を欠き、幼児の好きな動物の所でじゅうぶんに見ることが出来なかつたのは残念であった。お菓子五十円以下に制限して各自持参させたが、今度の場合は良かった。

三、実施後の指導と反省

翌日は疲れの為、とくに休む者はなかつた。話し合い、動物の自由表現をして、平日より一時間早く帰宅させた。二日目より、八日間

にわたり動物園ごっこに展開したが、あきることなくよろこんでいた。奈良には安全で美しく、広い公園があつても、珍らしい動物を見たり、汽車に乗ったり出来る場所を遠足地として撰ぶのも良いと思つた。また海のない県なので、広い海、汽船、燈台などを見せてやることが出来たらと考えるが、時間や経費の点で実施出来ないことを残念に思っている。

私がお茶の水の幼稚園時代にクローバの花が咲いている本校の草原へ及川先生に連れていっていただいたことがおりにふれて思い出される。あの頃は、ずいぶん遠くまで歩いたものだと思つていた。そして何より楽しかつたのですが時代の移り変りとともに幼稚園の遠足もずいぶん変わったものだと考えさせられます。

(奈良学芸大学付属幼稚園)

半年ばかり前から二・五軒離れた住山という戸数七十戸の部落へ

四軒迂回して国鉄バスが通るようになり、幼稚園から一歩出た所に

桐 井 つ た

遠 足

<遠足・運動会の反省>

一、実施前の指導および反省

遠足の五日前より象、熊、河馬などの歌を唱い、動物園の本を毎日

少しづつ読んで聞かせた。動物の習性などはかなり深いところまで

興味を持って聞くので幼児の発言を重んじながら進めていった。一

般に男児の方が興味が強く、IQの高い

紙芝居やスライドを利用した方が効果的であつた。ス

ライドも動物の習性を童話的に、

映写したらよかつたと感じた。またリズム遊び其の他で交通道徳や

整列の練習をおこなつておいた。

二、現場における指導と反省

動物園に着く。まず幼児と保護者が二列に並び見学を開始す。人数の関係で説明が徹底せず親まかせになって困った。こんな場合、保護者を少なくすること

も考えられるが、参加希望者が多いので、やむなく全部同行した。

現場指導の点から来年からもう少し隊形や区分けを考える必要があると感じた。中食は五十分の自由

行動を許したが、二三の保護者が売店で玩具類を買って園児に与えていた。事前に保護者に対する注意を徹底させておかなかつたのは失敗であった。また時間の配分が適切を欠き、幼児の好きな動物の所でじゅうぶんに見ることが出来なかつたのは残念であった。お菓子五十円以下に制限して各自持参させたが、今度の場合は良かった。

三、実施後の指導と反省

翌日は疲れの為、とくに休む者はなかつた。話し合い、動物の自由表現をして、平日より一時間早く帰宅させた。二日目より、八日間

にわたり動物園ごっこに展開したが、あきることなくよろこんでいた。奈良には安全で美しく、広い公園があつても、珍らしい動物を見たり、汽車に乗ったり出来る場所を遠足地として撰ぶのも良いと思つた。また海のない県なので、広い海、汽船、燈台などを見せてやることが出来たらと考えるが、時間や経費の点で実施出来ないことを残念に思っている。

私がお茶の水の幼稚園時代にクローバの花が咲いている本校の草原へ及川先生に連れていっていただいたことがおりにふれて思い出される。あの頃は、ずいぶん遠くまで歩いたものだと思つていた。そして何より楽しかつたのですが時代の移り変りとともに幼稚園の遠足もずいぶん変わったものだと考えさせられます。

(奈良学芸大学付属幼稚園)

停留所もできた。朝夕は別として、昼間三往復のバスはあれでよく採算がとれるかしらと首をかしげるくらい、いつもお客は二、三人だ。

バスの終点から五百米ぐらいの所に円福寺という禪宗黄檗派の古刹があり、山門園池をはじめ、鼓楼・経堂・本堂の配列、よく禪宗伽藍の様式を伝え、境内も広いときて、毎年適当な遠足の目的地がなくて困っていた矢先のこと、往きはバス利用、帰りは徒歩で遠足したら、ということに意見が一致、土地にあかるい人を先頭にまず実地踏査を試みた。

豊かそうな部落は今、取入れの真最中、澄んだ空気は空高く晴れあがって鈴鹿連峯がくっきりと浮出してみえる。

「不許入葦酒山門」と書いた石の門から山門までの山道にも、広い境内にもしいの実がたくさん落ちている。いちようやかえでの紅葉が目にしみるようだ。どこかのおばあさんが横見もせずしいを拾っていた。お寺のおしようさんは

「幼稚園の子が遠足に来ると前からきいていたら、繩をはって人が拾わんようにしておいてあげたのだが」とおっしゃる。

危険な所は全然見出せない。お弁当をひろげるのに適当なきれいな場所もある。しいや木の葉を拾って、カリキュラムの木の実木の葉の遊びへも発展できる。一同すっかり気に入って帰るとすぐ、バスの交渉を試みた。十時二十五分の定期便と、それに近づいてもう一台大型をまわしましょうと快諾。バス代園児ひとり四円。

遠足は十一月八日と決定。翌日家庭通信で連絡すると、それは大喜び、次の日バス代を忘れてきた人はほとんどない。

「先生、遠足早う来てほしいなあ。」
「バスどこから乗るの、幼稚園の横から。」
「お菓子持って行ってもいいの。」
一週間の待遠しいこと。砂あそびやシーソーをして遊んでいることもの口からも遠足の歌が流れる。前日、じょうぶな紙屑入袋を

二つくらい用意して、ごみは全部その中に入れてちらかさないこと、バスはレディーファーストで女の子を先に坐らせてあげることに、三人ずつ腰掛けること、押合

いしないで乗ること、おやつは無茶に多く持っていないこと、みだりに草や木を折らないことなどよく相談し、約束する。

わたくしたちは救急袋とズボン・パンツの用意を整える。
当日もまた、すばらしいよい天気。いつもより早くからリュックサックを一ぱいにふくらませたにこに顔の姿が登園する。

園庭で整列し、もう一度きのうの約束を繰返し、時間前に停留所まで進む。
「アッ、きたきた。」
思わず手をたたいて大はしゃぎ。だが押合う者はひとりもな

く、前から順に乗って、後の席から次々と席をかけていく。坐れなかった男児は運転手の後の方へ立って、これも大喜び。心配した座席の取合いなど全然なくて、スムーズに全員乗車、三人乗っていた

お客さんにも迷惑をかけなかったようだ。おかあさんたちと一しょの旅行にくらべて、何とすっきりしていることだろう。思わず胸が熱くなる。

「さよなら、さよなら。」
道ゆく人にも手を振っている。
「あつこの道、いもほりに通った道やが。」

「あれ、八幡さんへ行く道やな。」
三、四人を除いては、はじめて乗るバス路線だ。全員総立ち、座席は全然いらなくらいだ。
間もなく終点住山、所要時間十五分。よろこんでいる間に来てしまった。

下車も至極スムーズに終る。すぐ整列して円福寺へ。前にきめた組々の場所でのしいの実を拾う。ふと見上げると、風が吹くたびに銀色の小さな葉波がよせては返して躍るようだ。昔は全山しいの木ばかりで飢饉の折の難民救済に使った由、今は次々と切倒してしまつたが、それでも大きい木だけで二十数本はあるでしょうとのこと。続いて後続部隊も到着。それぞ

れの位置でしいの実拾い開始。

落葉や草をかきわけて丹念にさがしている子、一つ拾っては先生に見せに来る子、おかささんへのおみやげだと、手に一ぱいのしいをよろこんでいる子、しい拾いをやめて、山道や雑木林を走り廻っている子、落葉集めをしている子、

あちらこちらに歓声がある。ピリピリピリ、「おやつ頂きましよう。」

「あ、うれしい。」
「先生、この紐ほついて。」
「水筒の蓋とって。」
「柿むいて。」

先生は実に忙がしい。
三十分ばかりして、ピリピピリ、
「お弁当も頂きましよう。」
またしばらくがわめきが始り、おすし、おにぎりなど、それぞれの

お弁当を食べ終ると、すぐまたしいの実を拾っている子、いちょうやかえでの葉っぱを集めている子、築山にのぼって遊ぶ子、経堂

のまわりでかくれんぼする子、木立に入って「まつたけだ、まつたけだ」と叫んでいる子、先生と石畳のお堂で仏さんをおがんだり、庫裡の前の魚板に見入っている子、用意してきたクレパスで写生している子。わたしたちも、まだまだおりたいようだけど、時計はもう一時半。

ピリピリピリ「集まれ。」
「なーんだ、もう帰るのか。」
「先生、もつとおろに。」
「先生、また来うな。」
「わたしこんどの日曜におかさんと来うや。」

みんなでごみを拾って一ところに集める。
帰りはふたりずつ手をつないで歩くこと、おやつを食べながら歩かないこと、家の前まで来たら、先生さよならをして帰ることなどを約束して遅く着いた組から順次出発。

今までのように、年小組にもえらいえらいと言って足をひきずる子もなく、一回元気に二時過ぎ園に帰着。

「先生、きのうはよかったな、また連れてって。」

「バス素敵やったな。」
「おかささんにしいをいってでもろて食べたに。」

「わたしも、百あったに。」
自然ときのうの楽しかったことが話題にのぼる。

「遠足にいったこと、絵に書きましようか。」

天の橋立遠足の記

松谷郁子

昭和〇年当市で初めてトレイラーバスが、登場した頃のことである。幼稚園の前を走ること幼児たちはかけ出してこれを見送る。

好奇と羨望の交錯した眼。このバスはほとんどわが園の前を通る時は座席があいている。何とかなら

ないものかなあ」と考えた私は、バス会社に交渉、承諾を得て駅前までの三分間ほどをのせたのが乗物による遠足のはじまり。それが

「うん、書く。書く。」
みるみる中に、バスに乗っているところ、しい拾い、山門、魚板、お堂、おべんとう、帰り道など、いろいろの絵ができあがった。

うまく組合せたら一連の紙芝居ができあがり、拍手喝采の中に、きょうもまた楽しい一日が終った。(三重大学付属幼稚園)

幾変更して現在の天の橋立遠足となったのである。
○事前の注意
普通の遠足以外とくに汽車遠足として

- ・順序正しく
- ・敏捷に行動
- ・窓から頭や手を出さない
- ・座席のかけ方 など
- 「汽車やバスに乗る時は……うたもともに指導」
- 実施に当って私たちの配慮

・どの子も一ようのように楽しい一日であれ

・収穫も多かれ

・待つ喜の期間も一日も長かれ

十月に入るとカレンダ―をみせて、もう幾つ寝たら汽車遠足と楽しい夢を早くからもたせ、これを機会に各種乗物への関心をも高め、日ごとのりもの遊びへの発展にも配慮。当日は万全を期しての各学級委員四人の付添も、本日に限り、個人のお母さんでなくクラスみんなのお母さんであることを、母子ともによく認識、その線に沿った行動をとる。

どんな階層の子も含む当園としては、先生たち持参のお弁当も努めて平常通りのものを子どもたちのおやつも家庭からはいっさい持参せず園よりりんごとキャラメルを用意

◇当日

いよいよ出発。まだ一度も行ったことのない子もあり、経験ずみの子も幼稚園として一しよに行くのは、また格別にうれしさも増加するようす。話声もいつもよりい

つそういきいきとはずんで駅名を読み合い、窓外の道行く人に手をふっては呼びかけ、とんねるを数え上げるなど、よろこび満ち溢れる遠足風景。同乗の一般人の顔もおのずとほころびる始末。

やがて駅において駅前に掲げられた絵図の説明をうけ、往く道々、浮きつ沈みつするくらげを物めづらしく眺めたり、すごい貝の群生に目をみはり、回転橋を渡って砂場で少憩、楽しい昼食の後、貝ひろいに夢中になったり、キャッキヤツと歓声をあげつつ波とおっかけごっこに興じたり、大自然の砂

場で余念なく砂遊びをしたり、一かどの力士気どりでのお角力ぶりをお母さんたちにみていただいたり、たのしい遊びのいつ果てるとも知れぬ一日。

やがて再び汽車の人となり舞鶴の駅に降りたてば、早くも改札口に並ぶ顔、顔、顔、何れも朝送り出したわが子を案ずる表情、お母ちゃんを手をふる子、だまってに

つと笑いかける子、などなど、それぞれ表情に接して、やつと安

堵の胸をなでおろすお母さんたち。

「どうもありがとうございまして」の母の声

「先生さよなら」子どもたちの声を耳朶に残しつつ、私のおもい多

く。

ことに出迎えをうけなかった子のひとりもなかったことを幸にお

合同運動会

菊田との代

サクサク、サクサク、秋の澄切った空気に冴た鎌の音が溶込むように響いて、見る見る青草がなぎ倒されていく。時どき明るい喚声

が其処ここに湧き上る。今年もまた運動会が直ぐ目の前にやって来たのである。

「毎年のことだから思いきってこの草原を何とかしたらどうかしら」
「薬で焼いて土を盛るといいんだけど」

もう。
日ごと登園する子どもたちの背

後の親心をおもうことまた切。

兄弟ともにかえった子、母の手に伴われて帰った子、父の自転

車にのってかけていった子、どの子どもどの子も、今宵の夕餉よ楽し

かれ、今宵の夢よ円かなれと念じ

(舞鶴幼稚園)

「大学の運動場には珍しいでしようね」
誰の考も同じであらうし、口で言うのは易しい。が毎年実行されず

に年中行事の一つになつてはいる運動会前の草刈である。

大学生と園児のお母さまがまる

で姉弟のようにむつまじく、和気あいあいの運動場ならしは、ほんとうに日本中どの大学を探しても見つからない異風景ではなからうか、当園始つて以来六年間とかく

の非難を浴びつつ、なお此草刈が以然と続けられている由因は、案外こんなところにあるのかもしれない。

そして当日高々と万国旗がはためき、二千坪に垂とする運動場の中央は、白線が目を射るように円を描き、紅白の布が斜めに巻かれた入場門、退場門が晴々と立ち、立派な運動会場が出来上る。幼稚園母の会のバザーは大学生の大きな坊やと幼稚園の小さいお客様で大繁盛する、プログラムは順を追って次々に種目が進んでゆく。中でも毎年人気を呼ぶのは学生と団児のお母様がたとの共同競技である。

この大学の付属というのは幼稚園だけであって、それだけに、学園祭の一つである合同運動会は、園児と学生との間に非常な近親感を覚える。園児が転べば大学生が早速助けに走る。学生が競技をするとき「お兄ちゃんしつかり」といつせいに可愛い声援がある。こうして書いてみると、大、幼稚園一つになっていかにも楽しい行事

であるが、やはりここにも矛盾あり、悩みあり、反省もある。

単独の幼稚園ならば、もう少し幼稚園向きの運動会を催すことが出来るものをと……。

朝九時から、午後四時までの運動会では幼稚園にとつて少し長過ぎると思う。もちろん学生に依頼してプログラムを組むとき、幼稚園の部は遅くも三時には全部種目を終了出来るようにしてはあるのだが、これが単独ですとなればこの五時間をもつと有意義に使えるであろう。時間が長ければ長いほど、おとなの心もゆるみ子どもはそのゆるみに便乗してこの時とばかり我儘の羽をのばして、不規則な行動が多くなる。

バザーの繁昌に反比して子どものこの日一日の生活様式は急変し、健康につながるはずの行事の目的は外れてしまう結果になる。だが運動会の記憶画や、合作の中に満四才の子どもたちまでが、みんな大学生の「パン食い競争」や、「自転車ゆっくり競争」をたくみに表現しているのを見て、

「私は大学のお兄ちゃんと、運動会をしたのだ」というよろこびが強く印象づけられ、大きくなるまで、うれしい思出として残されるに違いない。
このためにも私もはもつとも
つと反省し、去年よりは今年、今年よりは来年と一歩一歩前進するよう、合同運動会について研究をしたいと念じている。
(同朋大学付属幼稚園)

秋季運動会の回顧

森 下 正 作

- 一、運動会の目的
幼稚園教育の一環として体育の方面より日常保育訓練の総練習とすること。
- 二、父兄と園児と教師と三者一体となり楽しき一日のレクリエーションとすること。
- 三、幼稚園と家庭との連絡を緊密にし幼児教育の振興に寄与せしむること。
- 二、運動の種類
個人的なもの、団体的なもの、遊技、競技などとし、なるべく園児と父兄と共同のものを選んだ。
- 三、運動会実施の心得
- 一、楽しく、元気に、きまりよくの標語をモットーとして終始整然とおこなうこと。
- 二、競技においては各個人の能力をじゅうぶんに發揮させ過勞に陥らぬよう注意すること。
- 三、審判については勝敗にのみこだわらず一等等と単にことばの上で賞賛し、時には体力に応じて努力した幼児には最後に褒めてやる一つも一着と呼んで褒めてやるようにし優越感や劣等感を持たせぬよう注意すること。
- 四、賞品は運動会全部終了後全員平等に賞品を授与して、少しも

差別なく互に楽しく閉会す。
 四、運動会に対する所感
 1. P.T.Aが終始一貫共同一致して諸準備から当日の進行あとかたづけに至るまでまったく自分の仕事の如く全責任をもつて協力せられ、さいわい好天氣に恵まれ盛大裡に終了出来たことは喜びにたえない。

2. 父兄と園児の共同遊競技についてはほとんど全員参加して親子互に手をつなぎ喜々としてなごやかな風景が転回されたことは、まことに幼稚園教育と家庭教育とが混然一体となりまことにほほえましい極みであった。
 (太田幼稚園長)

運動会をふりかえつて

黒川 鈴子

みのりの秋とともに、子どもたちの活動も一しほ旺盛になり「先生、早よう幼稚園の庭は狭いし、学校の運動場で走りっこしようなあー」「あしたも又しようね」「きつとよ、きつとよ」と運動会をひかえて、競技に、リズム遊戲にと、拍車がかけられる。

性を、あますところなく發揮し、双の瞳を輝かす。思わず「○○ちゃんばかりっこなの」と言い出しそうになるのを、「よくがんばって走ったね。よかつたね」と、汗で濡れた頭を撫ぜる。「うん」と、かぶりを振ったかと思うと、またスタートへと走り去っていく。

待望の運動会当日は、幼な子たちの、てるてる坊主への願いも空しく朝から兩空。そのことによつていっそう明日の運動会の期待も大きかった。翌日は願がかなって運動会日和。小学校の児童にまじって、白い運動帽・赤い鉢巻姿もかわいく、次々と競技は展開されていく。

園児のP・C(親子)のフォーグ・ダンスに、和やかな雰囲気がいっぱし流れる。親子手を取りあい、楽しそうに互に笑みを交わして、ルビ・ルー(イギリス)桑の中(アメリカ)のメロデーとともに、足どりも軽ろやかに踊るようすに、学校の観覧席の父兄たちからは、割れるばかりの拍手が起った。いつもあそびの仲間へ入れなかつたR児S児K児も、いつのほどにか、競争への興味にひかれ、歓声をあげて、あそびの中へ入っている。このように子どもに要求に基づいて、自然な型であそびの仲間入りができたことは、大きな収穫であつたと思う。

これらの演技を通して、どの子ども、どの子も心身ともに、生気に満ちあふれ、皆で、楽しい僕たち私たちの運動会をしようといつた、力強い、また、協力的な態度で運動会にのぞんだことを喜ばしく思う。

運動会の数日後、K児が「先生、ゆうべな、お父さんと、お母さんと、お兄さんと、僕と、みーんなでフォーグダンスしたよ、僕が先生になつて」と、いつになく晴れぱれた顔で私に話しかける。これだ！運動会といった場だけに限らず、家中がメロデーを口ずさみ、小さい先生を中心に、こんなひとときが一年の間に何回か、自然なかたちで生まれてくれることを。園生活にだけとどまらず、家庭生活の中にリズムが流れ、一家相和した雰囲気がいつまでも、かもし出されることを願っている。

こういうような健康的な明るさ、協力的な態度は、運動会のみにとどまらず、幼児期の生活のあらゆる場で生かされなければならぬものである。

また、運動会を契機として、幼児の心身の調和的発達を促すことから、活動の旺盛なこの時期を捉

え、個人の運動能力を伸長する機会として活用することの必要を感じ、運動能力を測定し、全園児・保育歴別（一年保育・二年保育年少、年長）年令別における傾向を知り、個人プロフィールによつ

自由表現を生かした運動会

佐藤悦子

て、発達段階に応じた計画をたて、集団指導の手がかりにし、いっそう健全な身体の子どもへと、努力している。

（滋賀大学付属幼稚園）

○発達段階の考慮と自由表現
従来運動会といえば、たんなるカケッコとたんなる遊戯が中心になる傾向があった。それらはいずれも画一的なものであり、特に遊戯などは、教師から既成のものを教え込まれ、一挙一動ま違えずにすれば「よくできた」と賞讃され、さもなければ、叱言の幾つもきかされながら無理矢理に、同じ動作を強制せられる傾向があった。

幼児にとって楽しいはずの運動会も、これでは興味が半減され、むしろ苦痛とさえ感じられる場合も少なくなかったであろう。

当園は、そのような過去のあり方を反省し、幼児に、無理なく、楽しみながら、誰でもが参加できる運動会にするためには、何が必要であるかを考えてみた。無理なく楽しくするための手段方法は、いくらでもあると思われるが、その根底をなす大きな条件は、発達段階の考慮と、自由性のある動き（表現）をさせることであると思

う。しかし発達段階を考慮するあまり、その動き全体が、単純且無味乾燥なものであったり、自由な動き（表現）のため、まとまりのつ

かないものであつては、その要をなさない。運動会であるからには、運動量があり、自ら楽しむと同時に、見るものを楽しませる要素を、ともにたなくてはならない。単純で自然な動きの中に、美しさの描かれるものを意図しながら、本年は次のような種目を試みてみた。

○本園の実態（小学校と合同）

春季の運動会は、集団生活に不馴れの幼児たちの集いであるため、とくに無理のない動きを考慮した。

○年少児拍子をとることを主とする。

○一年児前後の動きを主とする。

○年長児前後左右の動きを主とする。

秋季の運動会は、経験も豊富になり、表現力も的確旺盛になっているので、自由表現を主としたものを取扱ひ、併せて母親も参加出場させ、一しょになって、より楽しくリズム遊びをさせた。

○曲のある一部分だけは、まとまりのある体型を要求する。

○母親の動きと表現はグループごとに創意工夫をしよう。
競技（親子競技）

組	種目	期待する能力
年少児	だるまおとし	技力
一年児	猫にかん音感	機敏性
年長児	大積木で重たくり	力の協調
	家づくり	グループの協調
	創意工夫	創意工夫

○結び

とくに発達段階を考慮し、子どもに適した、しかも自由性のあるものを選び、反復練習しなければできぬようなむづかしい、あるいは画一的な内容のものは排除し、子どもがじゅうぶんに活躍でき、興味のあるものにした。運動会に必要な道具は、誘導の段階として、できるだけ幼児の手で製作させることが望ましく、また工夫させたいものと思う。

（鳥根大学付属幼稚園）

保 育 の 手 帖

「幼稚園教育と道德教育」について文部省の上野氏がかいておられる。先ごろの校長会の時にも議題となつてゐることである

し、教育それ自体はもちろんのこと、大きな社会問題も含んでいる事からである。

一、学校教育における道德教育強化の要請、二、幼稚園教育における道德教育、に分けて述べておられる。基本的行動様式、しつけの徹底は道德教育上きわめて重要な基礎的問題であり、学校が中心となつて家庭や社会の協力を求めて、その充実を図らざるを得ない。幼稚園教育においては、幼児の発達段階からみて、幼稚園教育要領に示された目標それ自体が、直接あるいは間接的に道德教育に関するものであるといわ

れている。幼稚園教育においては、道德教育は日常あらゆる面に教師が心を配つていふと思うが、文部省の方の立場からかかれたいものは、一読しておいてよいと思う。

「幼児の絵」霜田氏、三回にわたつてかかれたもので、今回で終る。たしか一回目を紹介したと思うが、今回は幼児の絵の問題についてどのように考えていったらよいのか、幼児の絵はどのように導かれるべきであるか述べられている。今後、指導の実際にあつて考えさせる問題を含んでゐるが、最後に創造を培う教育の重要性にふれ「絵は上手にかかなくともよい。下手でもよいから、人まねでなしに、自分で工夫して、自分の考えたように描くものだ。そういうように描けるのが偉いのだ」と、子どもに対して出来上りのよい結果を求めないで、自分の考えで工夫したものは、下手でも大いに賞め、奨励すれば、型から脱却して創造的な絵を描くようになっていくであろうと結ばれている。この点は、父兄の方

にも読んでいただきたいものである。

保 育

前号に続き、視聴覚についてはテレビについて「テレビジョンの聴視指導」(阪本越郎)「テレビを囲んで」が参考となるであろう。

最近、テレビ利用も保育案の中に現われているが、私どもも、われわれ個人の知識だけで、ただ利用しているにすぎない場合が多い。

テレビの教育効果、テレビ聴視指導と保育計画、指導上の留意点など、読むと、知っているようなまた知らないような点がある。頭の中ではつきり整理されて、テレビ利用にも力づよさがわく。またよい教育なることはよく理解できるが、これでよいかという迷いはつきりとされ、何かと私どもに参考を与えてくれる。

次に目を引くのは保育所の目録である。

「保育所の歩みと現況」「職場託児所」「保育所と保母」「保母の生活調査を顧みて」「保育所の給食献立」というように、保育所のさまざまなことがらをあげている。同じ使命にはげむものには、疑問も困難も、努力も喜びも皆ひとしいものではあるが、幼稚園とはまた環境が違う保育所の生活もお互に理解し、違う環境のことをのぞくことも一つの勉強になるであろう。

幼児の指導

今月は特集として、変りつつある幼児向けレコードをとりあげている。視聴覚教育と幼児向けレコードの推移について、西山昭二氏、地方のリズム指導講習会場を廻って、増子とし氏、リズム指導にレコードをどう利用したらよいか、渡辺茂氏が、それぞれの立場でのべられているので、レコードによるリズム指導の参考になるであろう。

美しい芸術に恵まれた国のイタリアの子どもについて、菊野正隆氏が書かれている。知らない国のことなのでおもしろく読めるが、考えさせられる問題を持っている。イタリアでは小学校がひけると、親が子どもを迎えにくく風習がある。またイタリア人は家庭と生活をたいせつにしている。そのため昼食時にはどんな人でも家に帰って食事をする。それで午後三時頃までは会社・銀行・工場・研究所などどこでも閉まってしまふ。子どもの性格の基本的な型は、大体学令前に家庭で形成されるといわれているので、このような風習が子どもの教育上いかなる影響を与えるかという点で重要なことと思われる。なお生活の中に音楽があり、芸術的な環境で子どもは育っていることや、子どもは甘やかされて育っていないのでしつけは厳しいことなど、具体的に示されている。イタリアの子どもの幸福は、すべての人がまず家庭を、自分の生活を第一主義的に考えているからではないか

と思われる。日本の一般の人、とくに男の人がもつと家庭のこと、子どものことを考えて欲しいということが、イタリアをみて来た著者の感想であると強調されている。上沢謙二氏の「ノートしてから、きめてから、」は、自分をふりかえてみるのよい機会を与えてくれると思う。

幼児と保育

今月の特集は「幼児は文化的にそだっているか。最近の「道徳教育旋風」のかげにかくれてしまったような観があるが、それだけに、このテーマがとりあげられていることに意義を感じる。

共同研究「幼児をとりまく文化的環境」では、「おもちゃ・歌、遊び場所」と三つの面からとりあげられているので、少しものたりない気もするが、コマ・シャリリズムに支配されている現状がよくわかる。終りに「自分の家の子どもだけ可愛がってはいは

子どもの幸福は得られない。皆で手をつないでみんなの子どものために努力しよう。そのために話し合う機会をもとう。」と呼びかけていることはうれしい。

「絵本のえらび方あたえ方」も、今まで何げなく買ひ与えていた絵本を評価しなおすのによい参考となる。

「進歩してきた育児用品」も、使いなれてきた道具が大いに工夫改良の余地のあることを示唆してくれる。

「子どもの仲間」(品川孝子氏)も子どもの社会性についての漠然とした知識を整理するの役に立つ。

その他「映画鑑賞教室」や「話題」欄で人種問題を取り扱うなど、とかく忙しさに追われて、視野の狭くなりがちな母親や教師にほしい幅の広さである。

保育ノート

特集「神経質な子ども」

ふだん子どもの姿を評するときちょっとした気持で「神経質」ということばをししば使っているけれども、考えてみるとたいへんあいまいなことばである。これは子どもの状態であるから、それをひき起しているところの原因を考える必要がある。

巻頭では池田教好氏が「子どもの神経質とはどんなものだろうか」という題で、神経質というのはどんな状態・現象を意味しているかということ、精神医学の領域からと常識的な意味、使用法をあげている。

そして神経質の原因として、

- 1、過敏性情動質
 - 2、子どもの神経衰弱
 - 3、てんかん性かんしゃく
 - 4、特定の心理的原因によるもの
 - 5、感情の発達不全
 - 6、劣等感の強いことからくる場合
- をあげている。「原因は個人により異なるが、性格形成上これは決して好ましい傾向ではないから、原因を正しく知った上で注意深い指導・治療が必要である。」と述べている。

また医学的の立場から「神経質な親と子について」(平井信義氏)がのべられている。

さらに「子どもを神経質にする保育」(牛島義友氏)では、子どもを教育的にそだてるためには適度の教育的刺げきを与えなければならぬのはいうまでもないが、また反面神経質の子どもを生み出す可能性もあるから、個性の条件や親の態度・家庭のふんい気・子どもの健康や体力・知能性格などを知った上で個性に即した教育をする必要があると述べている。そして一せい指導によるためにできやすい犠牲者に対する治療は、保育の片手間ではむずかしいので、専門家に相談することが望ましいといっておられる。

母の友

表紙いっぱい子どもの顔が描かれていて、やわらかい感じのする雑誌。六六頁の手ごころな厚さ。ひよいと手にとって開いて

みると、なかなか面白くてやめられずに、つい手揚げの中にしのばせて、電車の中や人を待つ間などに読み耽ってしまう雑誌である。

誌名は母の友。そして傍に——幼児をもつ母親の雑誌——と副題がついているが、この誌名は実に本誌の内容を言いあらわしていると思う。

四、五、六歳ぐらいの幼児をもつお母さんの、困っている問題や知りたかと思つている事がら、興味のある記事などが満載されている。

試みに十一月号を例にとろう。この月の特集は、反抗する子ども。

我が子の反抗期白書、の題の下では、松村康平氏、古川原氏、川田百合子氏、品川不二郎氏、辰見敏夫氏、早川元二氏、などの心理学者・教育学者・教育実家などが、日々起居をともししている目の前の我が子の反抗期の実状を語って、反抗期の意味・心理的教育的なその意義、さらにその導き

方などが、平易にわかり易く説かれていく。

次の「十字路に立つ子ども」では、反抗する子どもをもって悩んでいるお母さんと、これらおおぜいの子どもの扱って、いろいろの経験をもつ保育園の園長さんとの対談。

その他、一ヵ月分の童話（これは現場の先生方や、お母さんから寄稿されたもの）が載っているが、毎日、お話をしてとねだられて、話のたねに行き詰っているお母さんにとっては、どんなにか重宝で役に立つことであろう。

なお、子どもの病気のこと、問題の子どもの診療室、動物の母性愛について、嫁と姑との問題などがあって、お母さんにはもちろんのこと、幼児の先生にとってもおもしろく教えられることが多い。

幼児の教育 第五十七巻 第二号

◎ 定価 五十円

昭和三十三年一月二十五日印刷
昭和三十三年二月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館に願ひ致します。

お 願 い

今般別添キンダーブック調査カードにより、キンダーブックについて、いろいろの面からの調査をいたし、編集・企画の上に、大いに参考にさせて頂くことになりました。キンダーブックは一フレーベル館の発行物ではなく、純真な幼児の心の糧となるべき文化財です。この調査カードにより、広く全国の幼稚園・保育園の先生方のご意見を伺うことは、そのような点を考慮いたしましたことによります。

ご多忙中恐縮ですが概当事項に○印、または必要事項をご記入の上、おりかえしご郵送下さいますようお願い申し上げます。

三十三年二月

フレイベル館編集部



郵便はがき

郵便料金
受取人払
神田局承認
第 415 号

(切手不要)

(受取人)

東京都神田局区内

千代田区神田小川町二ノ五

株式会社

フレール館
行

(切取總)

氏名	園名	住所

キンダーブック調査カード

「キンダーブック」について下記事項の中で概当するところに○印をつけて下さい。

- 採用する場合について 1. 父母の意見による 2. 園独自の決定による
3. 園と父母との話し合いによる
- 取り扱いについて 1. 園で指導を加える 2. 家庭で指導するよう
父母に話す 3. 家庭の自由にまかせている
4. 園児の自由にまかせている
- 与え方について 1. 園児全部に与えている 2. 年長組のみ
3. 年少組のみ 4. 希望者のみ
- 年少用と年長用の2段階のキンダーブックの必要性について 1. 認める 2. 認めない 3. どちらでもよい

「キンダーブック」についてご意見ご批評をご記入願います。



一個わずか三〇円で、こんなに幼児の生活を楽しくするものが、他にあるでしょうか？ しかも、一生何をするにも大切な、リズム感をよくするのに、なくてはならないものです。だから、どこの幼稚園にも、保育園にもあるのですが、ぜひ一人に一個を持たせましょう。

白櫻社

株式会社

いろいろな類似品がありますが、やっぱりこれが一番工合がよいと言われているます。どこかの楽器店にも（アメリカでも）必ずあります。替紐もあります。

1個30円

大阪学芸
大学教授

小川正通訳著

B6判
美装 価三五〇円

ソ連の幼児教育

— ソローキナの就学前教育学 —

ソ連の幼稚園・保育所

家庭の教育はどうなっているか？

現代ソ連の科学技術の巨大な成功は、今や全世界の驚異の的となつてゐるが、その基盤をなす教育においても、ソ連は常に新しい道を開拓しつゝある。本書は就学前の三—七才児に対する教育の理論と実際の全貌を判り易く懇切に解説したものである。幼稚園、保育所の先生はもとより、教育にたずさわる教師や一般家庭の両親の方々に推奨しうるに足る内容豊富な名著である。

【内容】ソ連の教育と教育学の目標—就学前教育の発展—三才迄の教育と集団教育—就学前教育の目標—就学前教育の原則と内容概説—身体教育—日課と衛生的習慣の養成—遊びとその指導—仕事とその指導—道德教育—労働による教育—精神教育—国語教育、数教育と美的教育—祝祭日と楽しむ教育—指導—幼稚園の教育計画と教育活動の評価—幼稚園の組織と管理—幼稚園の教師—幼稚園と家庭—幼稚園と初等学校。

メデインスキイ著
鹿島保夫訳

B6上製
三八四頁 価四六〇円

ソヴェトの国民教育

本書は托児所、幼稚園から小、中、大学に至る迄のソ連の教育組織と文化活動の全貌を最近の統計資料によつて解明した力著

発行所

東京都新宿区赤城下町四六
振替東京七八三〇三番

理想社

古い歴史と新しい編集の観察絵本

キンダーブック

= 第12集 第12編 3月号予告 =



☆お子さま方の感情と知識を

豊かに育てる絵本☆

A4判・16頁
毎月付録付
定価四十五円

△三月号内容予告

たのしい てすと

指導・坂元彦太郎先生

三木 安正先生

☆くみきあそび

絵・吉沢廉三郎先生

☆ひなまつり

絵・林 義雄先生

☆はやい はやい

詩・与田 準一先生

☆どうぶつ

絵・木俣 武先生

☆かいもの

絵・鈴木 寿雄先生

☆あしたは

なを もっていこう

☆いぬと さる

絵・武井 武雄先生

☆みんな

げんきで

☆どうぶつえん

絵・河目 悌二先生

別冊付録「つばめのおうち」

工作付録「おひなさま」

東京都千代田区 株式会社
神田小川町 2の5

フレール館

電話東京(29) 7781~5
振替口座東京 19640 番